

松江市文化財調査報告書 第178集

(仮称) アークタウン山代造成工事に伴う発掘調査報告書

## 光 泉 寺 遺 跡

平成29(2017)年2月

島根県松江市教育委員会  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団



(仮称) アークタウン山代造成工事に伴う発掘調査報告書

## 光 泉 寺 遺 跡



平成29(2017)年2月

島根県松江市教育委員会  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団



# 例　　言

- 本書は、平成 28 年度に実施した（仮称）アークタウン山代造成工事に伴う光泉寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 本書で報告する発掘調査は、株式会社ライズアークから松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
- 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

(名 称) 光泉寺遺跡

(調査地) 島根県松江市山代町字光泉寺 349 番 1、350 番、350 番続 1  
〃 字沖田 354 番 1

## 4. 現地調査の期間

1・2 区 平成 28 年 7 月 4 日～平成 28 年 8 月 25 日（当初）

3 区 平成 28 年 9 月 1 日～平成 28 年 10 月 20 日（追加）

## 5. 開発面積及び調査面積

開発面積：3,671.4m<sup>2</sup>（当初：2,914.66m<sup>2</sup>、追加：756.74m<sup>2</sup>）

調査面積：368.2m<sup>2</sup>（1 区：223.7m<sup>2</sup>、2 区：110.3m<sup>2</sup>、3 区：34.2m<sup>2</sup>）

## 6. 調査組織

依頼者 株式会社 ライズアーク 代表取締役 山田 登

主体者 松江市教育委員会 教育長 清水 伸夫

### 【平成 28 年度】 現地調査及び報告書作成業務

調査指導 島根大学 法文学部 教授 大橋 泰夫

島根県教育庁 文化財課 企画員 守岡 利栄

事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 藤原 亮彦

〃 次長（まちづくり文化財課長兼務） 永島 真吾

〃 まちづくり文化財課

〃 専門幹（埋蔵文化財調査室長兼務） 飯塚 康行

〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係長 赤澤 秀則

〃〃〃〃 主幹 川上 昭一

〃〃〃〃 学芸員 三宅 和子

〃〃〃〃 嘴託 門脇 誠也

実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 清水 伸夫

埋蔵文化財課 課長 曽田 健

〃 調査係 係長 川西 学

〃〃 調査員 廣瀬 貴子（担当者）

〃〃 調査補助員 門脇 祐介

7. 調査に携わった発掘作業員

井川洋、岩成博美、木村司、勝部誠、加藤恵治、土江伸明、中村慎一、林博章、深津靖博、  
峰谷一雄

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下の者が行った。

須藤佳奈子

9. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教授、ご協力を頂いた。  
記して謝意を表する。(敬称略)

島根県教育庁 埋蔵文化財調査センター 調査第二課長 守岡 正司

10. 本書の執筆は第1章を松江市埋蔵文化財調査室が、第2章～第6章を廣瀬が執筆した。また、編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て廣瀬が行った。

11. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。

[縄文土器]

柳浦俊一 1994 「島根県の縄文時代後期中葉～晩期土器の概要」『島根考古学会誌 第11集』

[土師器]

島根県教育委員会 2013 『史跡出雲國府跡－9 総括編－』

[須恵器]

大谷晃司 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会

島根県教育委員会 2013 『史跡出雲國府跡－9 総括編－』

[中世土師器]

廣江耕史 1992 「島根県における中世土器」『松江考古 第8号』松江考古学談話会

日本中世土器研究会 1998 『中近世土器の基礎研究XIII』

[陶磁器]

太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編－』

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念－』

12. 本書に掲載する土層は、『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修:財団法人  
日本色彩研究所 色票監修に従って表記した。

13. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。また、レベルは海拔標高を示す。

14. 本書における遺構の略号は以下のとおりである。なお、掘立柱建物跡（SB）なのか、柱穴列（SA）  
なのか判断がつかないものについては SB としている。

SI : 積穴建物跡 SB : 掘立柱建物跡 SA : 柱穴列 SD : 溝 SK : 土坑

SP : 柱穴 SX : 不明遺構 NR : 自然流路

15. 本書で掲載した遺構図の縮尺は、各図に縮率とスケールを明記した。遺物実測図の縮率は原則1/3  
とし、断面は土師器を白ヌキ、須恵器を黒塗り、石製品を網掛けで示した。陶磁器の断面は陶器を白ヌキ、  
磁器を黒塗りで示した。また、瓦の縮率は原則1/4とし、断面を網掛けで示している。

16. 出上遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。

# 目 次

## 例言

第1章 調査に至る経緯.....	1
第1節 調査の経緯 .....	1
第2章 位置と歴史的環境.....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	3
第3章 1区の調査.....	6
第1節 調査の概要 .....	6
第2節 基本層序 .....	6
第3節 遺構と遺物 .....	6
第4章 2区の調査.....	13
第1節 調査の概要 .....	13
第2節 基本層序 .....	13
第3節 遺構と遺物 .....	14
第5章 3区の調査.....	19
第1節 調査の概要 .....	19
第2節 基本層序 .....	19
第3節 遺構と遺物 .....	20
第6章 総括.....	25
第1節 遺構について .....	25
第2節 出土遺物の様相 .....	26
第3節 結語 .....	27
遺物観察表.....	32
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第 1 図	開発範囲と調査区配置図	1
第 2 図	調査区全体図	2
第 3 図	周辺の遺跡分布図	5
第 4 図	1 区遺構全体図	7
第 5 図	1 区土層断面図	8
第 6 図	S101 実測図	9
第 7 図	SB01 実測図	9
第 8 図	SB02 実測図	10
第 9 図	SB03 実測図	10
第 10 図	SB03 出土遺物実測図	10
第 11 図	SD01 実測図	11
第 12 図	SD01 出土遺物実測図	11
第 13 図	SK01 実測図	11
第 14 図	SK01 出土遺物実測図	11
第 15 図	1 区包含層出土遺物実測図	12
第 16 図	2 区遺構全体図	13
第 17 図	2 区土層断面図	14
第 18 図	SB04・SA01・SA02 実測図	15
第 19 図	SB04・SA01・SA02 出土遺物実測図	16
第 20 図	2 区包含層出土遺物実測図①	17
第 21 図	2 区包含層出土遺物実測図②	18
第 22 図	3 区遺構全体図	19
第 23 図	3 区土層断面図	19
第 24 図	SB05 実測図	20
第 25 図	SB05 出土遺物実測図	21
第 26 図	SB06・SB07 実測図	21
第 27 図	SB07 出土遺物実測図	22
第 28 図	SK02・SX02 実測図	22
第 29 図	SK02 出土遺物実測図	22
第 30 図	SD02 実測図	23
第 31 図	SD02 出土遺物実測図	23
第 32 図	明治 22 年光泉寺遺跡周辺の字切図	24
第 33 図	3 区包含層出土遺物実測図	24
第 34 図	光泉寺遺跡・山代沖田遺跡遺構配置図	28
第 35 図	光泉寺遺跡周辺の遺跡分布図	30

## 挿表目次

表 1	出土土器組成表	26
表 2	光泉寺遺跡・山代沖田遺跡 SB・SA 計測表	29

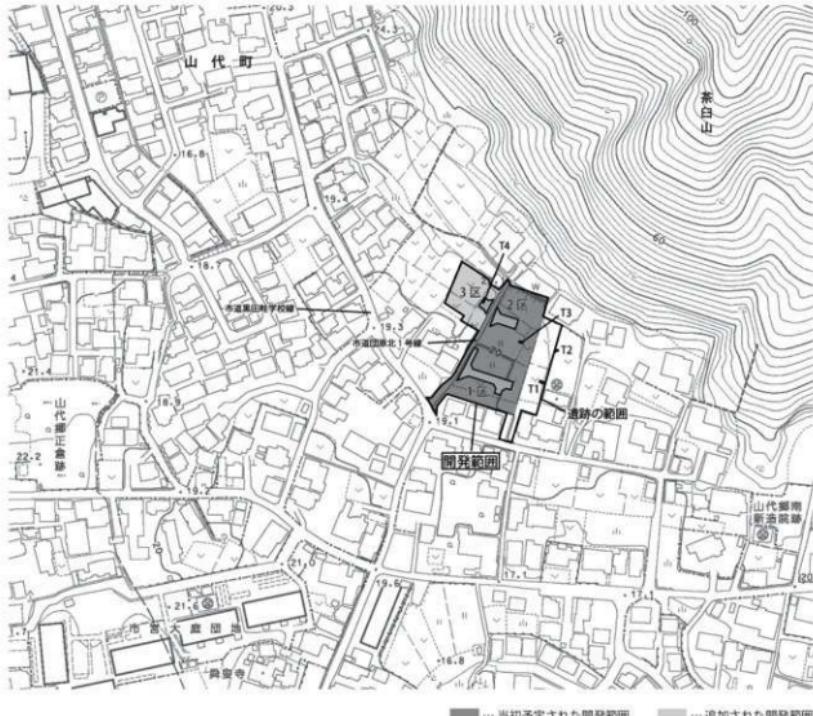
## 写真図版目次

図 版 1	光泉寺遺跡から茶臼山を望む（南西から）、1 区東側完掘状況（北西から）	
図 版 2	1 区完掘状況（西から）、1 区 SK01 完掘状況（南西から）、1 区短頭壺出土状況、 1 区南壁土層断面（北東から）	
図 版 3	1 区南西側完掘状況・S101（北東から）、2 区完掘状況（南西から）	
図 版 4	3 区完掘状況（南西から）、3 区 SP34 半截状況（南西から）、3 区 SK02 完掘状況（東から）	
図 版 5	SB03 出土遺物、SD01 出土遺物、SK01 出土遺物、1 区包含層出土遺物①	
図 版 6	1 区包含層出土遺物②、SB04・SA01・SA02 出土遺物、2 区包含層出土遺物①	
図 版 7	2 区包含層出土遺物②	
図 版 8	SB05 出土遺物、SB07 出土遺物、SK02 出土遺物、SD02 出土遺物、3 区包含層出土遺物	

# 第1章 調査に至る経緯

## 第1節 調査の経緯（第1・2図）

平成28（2016）年3月2日、（仮称）アーチタウン山代造成工事予定地3,729m<sup>2</sup>における埋蔵文化財の有無確認調査依頼書が提出された。開発予定地内には周知の光泉寺遺跡が所在しており、その範囲を確認するための調査（T1～T3）を同年3月17日に実施し、溜池以外の丘陵緩斜面及び水田中で遺跡の広がりを確認した。この試掘調査結果を受けて事業の一部が見直され、同年4月21日に溜池及び掘削が必要となる丘陵緩斜面を除外した2,914.66m<sup>2</sup>での文化財保護法第93条第1項に基づく届出が提出された。当該工事については盛土によるものではあるが、公衆用道路が含まれているため、この部分について本発掘調査を実施することとなった。調査は、開発予定地南側の東西道路を第1調査区（以下、1区）、北側の東西道路を第2調査区（以下、2区）とし、7月4日より調査に取り掛かった。



1区の調査が進行中の7月下旬、開発予定地の西側丘陵の756.74m<sup>2</sup>についても追加で宅地造成工事が行われることとなり、合わせて当初計画では除外された溜池についても地元要望により埋め立てが行われることとなった。7月28日に埋蔵文化財の確認調査依頼書が提出され、8月17日に試掘調査を実施し、西側拡張部分についても光泉寺遺跡が広がっていることを確認した。これを受け、8月18日に文化財保護法第93条第1項の変更協議書が提出された。追加の造成地についても盛土による工事計画であったが、同じように公衆用道路が含まれており、ここを第3調査区（以下、3区）として9月1日～9月16日の間で本調査を実施した。更に、3区については5m道路が6m道路に変更されることとなり、道路南辺と北辺のそれぞれ0.5m部分を10月14日～10月20日の間で本調査を実施している。



第2図 調査区全体図 (S=1:400)

## 第2章 位置と歴史的環境

### 第1節 地理的環境（島根県・松江市位置図、第3図）

光泉寺遺跡は島根県の東部、松江市南郊に位置しており、地番では山代町字光泉寺 349 番地外となる。『出雲国風土記』に「神名樋野」<sup>(1)</sup>として記載されている茶白山（標高 171.5m）の南西裾部にあたり、微視的には低丘陵と低丘陵に挟まれた谷水田が遺跡の大部分を占めている。調査前の標高は、1 区から 2 区にかけての谷水田部分で 18.8 ~ 20.8m、低丘陵の調査区となる 3 区周辺が 20.5 ~ 20.8m である。

遺跡の南西には意宇川<sup>(2)</sup>が作り出した意宇平野が展開しており、市内でも有数の穀倉地帯となっている。古代においては平野の南西に出雲国府が置かれ、北東平野に面した低丘陵には出雲国分寺や国分尼寺が配置された。まさに当地周辺は古代出雲の中心地域であり、遺跡も多い。

第2節では時代ごとに当地周辺の遺跡の紹介を行う。

### 第2節 歴史的環境（第3図）

**旧石器時代** この時代の遺構は確認されていないが、遺物は出土している。本遺跡の南東側に位置する市場遺跡（3）から黒曜石製細石核が、茶白山の北側にある山代郷北新造院跡（来美庵寺）（60）から玉髓製ナイフ形石器が、下黒田遺跡（11）から玉髓製石核と剥片が出土している。

**縄文時代** この時期の遺跡についても遺物は出土しているが、遺構は確認されていない。茶白山西側の低地に位置する柳塙遺跡（15）では晩期の土器が、意宇平野に位置する布田遺跡（48）では前期、後期、晩期の土器が、才塙遺跡（39）、上小紋遺跡（37）、大坪遺跡（41）では後期や晩期の土器が出土している。

**弥生時代** 弥生時代の遺跡は主に意宇平野内の縁辺部に位置している。布田遺跡は前期後葉から中期に営まれた集落遺跡で、玉作り関連遺物や漆生産関連遺物が出土している。大坪遺跡からは中期末から後期の竪穴建物跡が、平所遺跡（56）では玉作りを行っていたと考えられる竪穴建物跡が検出されている。

稲作関連の遺跡では、水田跡やしがらみ状遺構が確認された夫敷遺跡（47）や上小紋遺跡、向小紋遺跡（36）が所在しており、意宇平野においては、この頃には既に稲作が行われていたことがわかる。その他、中竹矢遺跡（52）では、弥生時代前・中期からの粘土採掘土坑が多数確認され、古墳時代前・中期まで長期間にわたって採掘されていたと考えられている。大坪遺跡や間内遺跡（46）でも同様の土坑が検出されており、土器焼成の原料となる白色粘土の採掘坑と指摘されている。墳墓としては、間内越墳墓群（55）で、四隅突出型埴丘墓が確認されている。

**古墳時代** 古墳では、前期の廻田古墳群（69）が確認され、1号墳は全長 58m の前方後円墳である。古墳時代中期から後期には茶白山西麓や意宇平野の南縁に大型古墳が築造されている。中期古墳では、造り出し付方墳である大庭鶴塚古墳（65）や西百塚古墳群（27）、東百塚古墳群（28）がある。後期の古墳では、全長 94m の前方後方墳、山代二子塚古墳（64）や、一辺が 45m 以上の山代方墳（63）、「額田部臣」の銘文が刻まれた円頭大刀が出土した岡田山古墳群（25）、前方後円墳の東淵寺古墳（16）

のほか、石棺室石室が検出された向山古墳群（66）、永久宅後古墳（62）が所在している。同時期の横穴墓では、意宇平野周辺部の丘陵斜面に十王免横穴墓群（57）や孤谷横穴墓群（61）、安部谷横穴墓群（30）がみられる。集落遺跡では、山代沖田遺跡（2）で竪穴建物跡が確認されているほか、神田遺跡（34）や夫敷遺跡で土器や木製品が出土していることから、集落の存在が窺われている。また、特筆すべきは、出雲国府跡（40）において古代の遺構面の下から建物跡や祭祀空間、方形区画溝、渡来系遺物が確認され、首長居館に類する施設と評価されている。

**古代（奈良時代・平安時代）** 意宇平野とその周辺には官衙関連の遺跡が多い。出雲国府跡や山代郷正倉跡（12）では建物跡や溝が検出され、正倉跡では炭化米が出土している。正倉跡南側に位置する下黒田遺跡では大型掘立柱建物跡や大溝が確認され、官衙関連遺跡とされている。

寺院では、『出雲國風土記』に記載されている山代郷北新造院跡（來美庵寺）と山代郷南新造院跡（四王寺跡）（8）がある。山代郷南新造院跡は本遺跡の南東側200mに位置し、主要伽藍の基壇が検出されている。また、山代郷南新造院跡の南に位置する山代大畠遺跡（5）からは、直径1.2mの柱穴を作り建物跡や、山代郷南新造院跡の南辺の区画溝の一部を検出し、山代郷南新造院跡に関わる遺跡として注目されている。小無田II遺跡（6）は山代郷南新造院に瓦を供給していた窯跡として知られ、3基の窯跡が確認されている。

川原宮II遺跡（70）では、奈良時代から平安時代の粘土探掘坑が約300基検出され、その性格は先述した中竹矢遺跡や大坪遺跡と同じと考えられている。古代山陰道（正西道）推定ルート<sup>(3)</sup>に位置しているが、調査において明確な道の遺構は確認されておらず、粘土探掘坑が濃密に分布する区域だったことが影響していると推察されている。

**中世** 中世の遺構や遺物が確認された遺跡は、山代沖田遺跡、天溝谷遺跡（31）、大屋敷遺跡（33）、市場遺跡などである。天溝谷遺跡では掘立柱建物跡や貿易陶磁器、常滑焼や瀬戸焼の遺物が多く出土し、山代沖田遺跡では、直径約1mの柱穴をもつ建物跡や総柱建物跡が主軸を同じにして配置されている。他に、本遺跡の西側にあたる内堀石塔群（4）で、室町時代から安土桃山時代までの五輪塔などの石塔が確認されている。

山城では、茶臼山城跡（67）が所在する。茶臼山城跡は、「雲陽誌」に村井伯耆守の居城であったと伝えられ、中海と宍道湖を結ぶ大橋川の南側から北側の動静を監視、防御する位置にあり、軍事的に重要であった。<sup>(4)</sup>

本遺跡周辺の字名をみると、遺跡名となっている「光泉寺」や「師王寺」、「寺の前」、「光徳庵」といった寺院、仏教に関するものや、「市場」、「鍛冶屋」といった生産活動に係るもの、「内堀」、「内屋敷」などの居館に関するものが認められる。これら字名の由来となった寺や施設について書かれた文献史料はないが、中世から近世にかけて政治、経済、宗教活動の空間領域が存在していたことを示唆している。

### 【注】

(1)『出雲國風土記』において、神のこもる森や山などを示す「かんなび」の名は、この地に、秋殿郡、櫛縄郡、出雲郡に各1箇所みえる。

(2) 松江市八雲町熊野を源とし、北東に流れ中海に注ぐ約15kmの河川である。『出雲國風土記』には「意宇川、源は郡家の西南一十八里なる熊野山より出でて北に流れ、東に折れ、湧て入海に入る。」とある。熊野山は現在の天狗山のことであり、熊野太社の元社があった場所である。

(3) 古代山道の複数ルートについては、鷹部昭氏(「正西道の検討」『出雲古代史研究3』1993年)や中村太一氏(『出雲国風土記の空間認識と道路』「日本古代国家と計画道路」1996年)が詳細に論じておられる。川原宮II遺跡の位置は、鷹部、中村両氏の複数ルート上に位置しているが、調査において古代山道に関わる遺構は確認されていない。

(4) 「吉備道」は1717(享保2)年に黒沢長尚によって著述されたものである。

(5) 本道跡周辺の字名は、「風土記の丘地内発掘調査報告書Ⅵ」のなかの「第3回 茶臼山および周辺の字名地図」を参考にし、第35図に記載している。字名については第35図を参照して頂きたい。

#### 【参考文献】

加藤義成 1981年:『修訂出雲國郷土記彙究』

黒沢長尚 1930年:『吉備道』

島根県教育委員会 1981年:『史跡出雲國山代郡正倉跡』

島根県教育委員会 1984年:『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

島根県教育委員会 1988年:『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅴ』

島根県教育委員会 1990年:『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅶ』

島根県教育委員会 2013年:『史跡出雲國御跡9 統括編一』

島根県教育委員会 2016年:『川原宮II遺跡』『神龍寺跡・茶臼山遺跡・川原宮II遺跡』

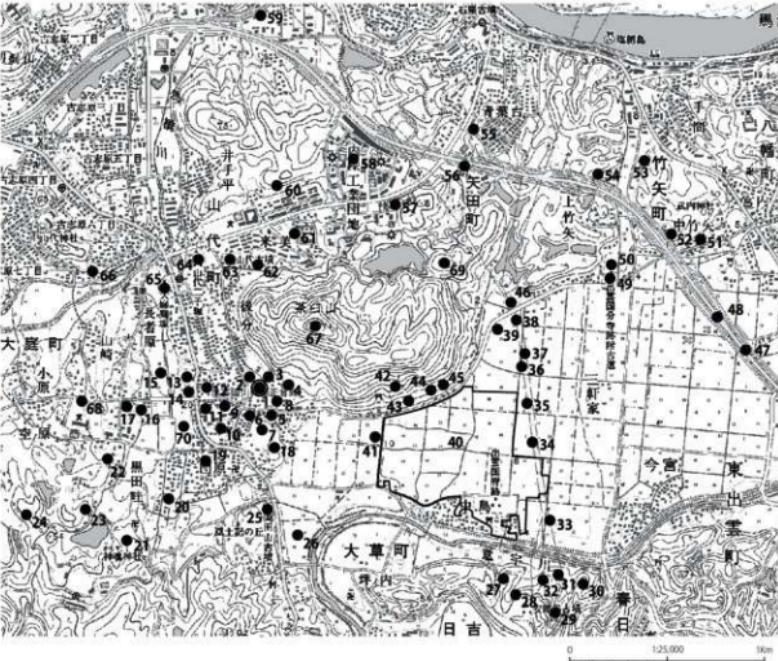
島根県立出雲立派風土記の丘 2015年:『古代出雲文化遺産の意宇の開発史』

中国電力株式会社島根支店、島根県教育委員会 1987年:『北松山(幹線)建設工事・松江連絡線新設工事予定期内埋文化財発掘調査報告書』

松江市建設部建築課、松江市教育委員会 1988年:『下山田山遺跡発掘調査報告書』

松江市教育委員会 2012年:『山代町山道跡』

松江市教育委員会 公益財團法人松江市スポーツ振興財团 2014年:『神龍寺道・大原原ノ前遺跡』



- |            |             |               |           |               |              |
|------------|-------------|---------------|-----------|---------------|--------------|
| 1. 光景寺遺跡   | 13. 大崩原ノ前遺跡 | 24. 荒神谷・垂谷古墳群 | 36. 向小較遺跡 | 48. 布田遺跡      | 60. 山代郡北新造跡  |
| 2. 山代町山道跡  | 14. 山代郡正倉跡  | 25. 開田山西古墳    | 37. 上小較遺跡 | 49. 出雲國分寺跡附古道 | 61. 獅谷橋穴古墳   |
| 3. 市場跡     | 15. 岩屋跡     | 26. 岩屋後古墳     | 38. 大平遺跡  | 50. 出雲國分寺跡    | 62. 永久宅宿古墳   |
| 4. 内野古墳群   | 16. 霧海寺跡    | 27. 西百尋山古墳群   | 39. 才塚遺跡  | 51. 出雲國分寺跡    | 63. 山代方舟     |
| 5. 山代大壠遺跡  | 17. 外相敷遺跡   | 28. 西百尋山古墳群   | 40. 伊勢河原跡 | 52. 伊勢河原跡     | 64. 今宮古墳     |
| 6. 黒田ノ遺跡   | 18. 四葉古墳    | 29. 大茅原古墳     | 41. 大坪遺跡  | 53. 長峰遺跡      | 65. 大庭穂佐古墳   |
| 7. 小糸原古墳群  | 20. 出雲造訪跡   | 30. 安部谷柄六群    | 42. 大谷城六群 | 54. 才ノ井遺跡     | 66. 向山古墳群    |
| 8. 山代御跡新造跡 | 21. 大石古墳群   | 31. 萩谷遺跡      | 43. 真名井遺跡 | 55. 間内越谷墓群    | 67. 系日山城跡    |
| 9. 黒田難跡    | 22. 秋ノ葉古墳群  | 32. 古天神古墳     | 44. 聖者遺跡  | 56. 平所遺跡      | 68. 大庭小学校校庭跡 |
| 10. 川原遺跡   | 23. 大石橋穴群   | 33. 大原敷遺跡     | 45. 大谷遺跡  | 57. 十王龕穴墓群    | 69. 畠田古墳群    |
| 11. 下黒田遺跡  | 24. 神田遺跡    | 34. 神田遺跡      | 46. 間内遺跡  | 58. 来美先墳      | 70. 川原宮II遺跡  |
| 12. 山代郡正倉跡 | 25. 四配田遺跡   | 35. 向田遺跡      | 47. 夫失遺跡  | 59. 石台遺跡      |              |

第3図 周辺の遺跡分布図 (S=1:25,000)

## 第3章 1区の調査

### 第1節 調査の概要（第4図）

1区は、開発範囲の南東側に位置する。道幅5mの道路部分で、長さは約29mを測り、調査面積は223.7m<sup>2</sup>である。南西端にトレンチを掘って地山確認を行い、その結果に基づいて、重機による耕作土や床土の掘削を実施した。土層観察では遺構の掘り込み面は確認出来なかったため、遺構検出は便宜的に地山面で行っている。検出した遺構の深さはいずれも浅く、柱穴も上屋の建物や施設を維持できるような深さではないことから、遺構の機能面は検出面より上方であると考えられる。また、地山面には幅5～20cm、深さ3～10cm程度の蛇行しながら流れた流路痕跡がいくつも確認された（第4図アミ掛け部分、写真図版2上左）。流路には新旧関係が認められ、浸食と堆積を繰り返しながら断続的に流れていたと思われるが、流路が形成された基盤面については確認できていない。したがって、遺構と流路の新旧関係については不明である。

調査の結果、円形の建物跡1棟（SI01）、掘立柱建物跡3棟（SB01～03）、土坑1基（SK01）、溝1本（SD01）を検出している。

以下、第2節で基本層序を、第3節で遺構と遺物について報告する。

### 第2節 基本層序（第5図）

1区は現状谷水田及び畠地であり、現地表面標高は18.8～20.1mを測る。地山面は調査区北東端で標高19.8m、南西端で標高18.3mを測り、北東側から南西側に向かって徐々に傾斜している。

第5図は、1区の南壁土層断面である。3～5層は耕作土及び床土である。土師器や須恵器、陶磁器などが出土している。7層（褐灰色粘質土）は、調査区全体に10～30cmの厚さで堆積した締まりのある土層で、奈良時代から平安時代の土師器、須恵器が出土している。8世紀後半から9世紀前半のものが主体をなし、古代の土層と考えられる。8層（黒褐色土）は、調査区全体に10～40cmの厚みで堆積した土層である。この土層も7層と同様な土器組成であり、同時期頃の上層と思われる。9、10、14～28層は遺構埋土、11～13層は流路埋土、29層は地山である。遺構埋土は、黒色土～黒褐色土を呈し、一部地山土層が混在していた。流路の検出面から土師器や須恵器の細片が出土している。

1区北西端で検出したNRO1の土層は、黒色土～黒褐色土系の粘質土である。NRO1は2区のNRO2と同一流路と考えており、詳細は第4章の基本層序で後述する。

### 第3節 遺構と遺物

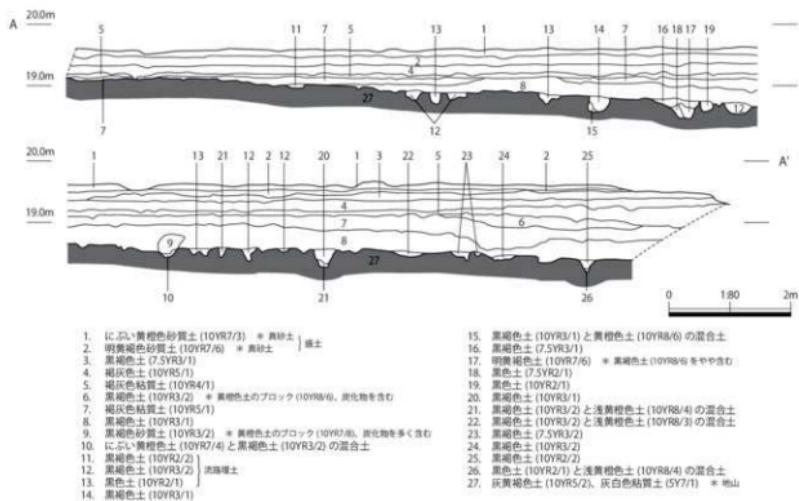
#### SI01（第6図）

SI01は、調査区北西側で検出した円形の建物跡で、北側調査区外へ続いている。建物の直径は5.7m、床面積は25.5m<sup>2</sup>、検出標高は約18.5～18.7mを測る。柱穴を9個検出し、平面形は円形から梢円形を呈し、規模は直径18～43cm、深さ6～23cmを測る。柱穴はいずれも浅く、本来の遺構面は検出面より上方であったと思われるが、この建物跡が平地建物なのか竪穴建物なのかは不明である。

柱穴内から遺物が出土していないため時期は不明であるが、1区の耕作土から縄文土器が出土し、他の調査区からも打製石斧や石錘が出土していること、弥生土器は出土していないことから縄文時代



第4図 1区遺構全体図 (S=1:150)



第5図 1区土層断面図 (S=1:80)

の建物の可能性が考えられる。

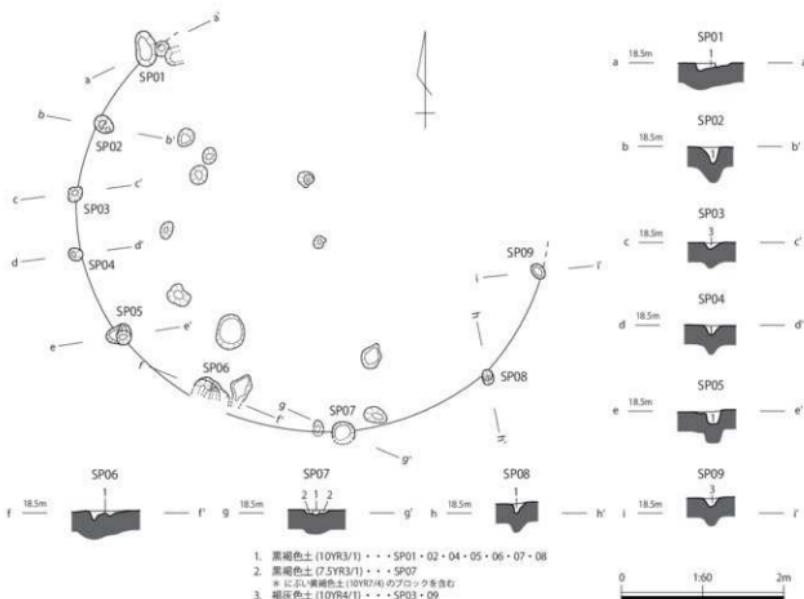
#### SBO1 (第7図)

SBO1は、調査区中央の南側に位置する。柱穴4個がN-67°-Wの方位に並び、検出した範囲での規模は5.5m(3間)を測る。検出面は北東側から南西側に緩やかに傾斜し、検出面の標高は18.47～18.68mを測る。この柱穴列の北側に対応するものがないことから、南側調査区外へと続く建物跡と考えられる。柱穴の平面形は円形や楕円形を呈し、規模は上端径28～42cm、深さ8～27cmを測る。SP13の底面から幅17cm、厚さ6cmの礎盤石が出土し、13cmの柱痕跡を確認している。柱間はSP10-11が1.9m、SP11-12が1.9m、SP12-13が1.7mである。SP13の柱掘方埋土から土師器や須恵器の細片が出土している。須恵器のなかに古代と思われる破片があることから、SBO1の時期は古代以降と捉えておく。

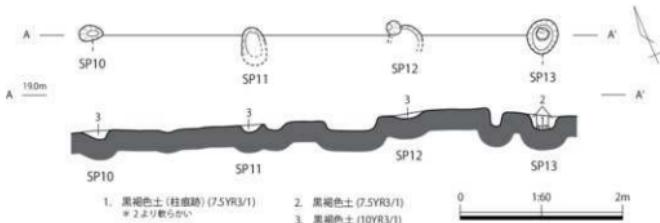
#### SBO2 (第8図)

SBO2は、調査区南東側で検出し、検出面標高は19.38～19.54mを測る。柱穴4個がN-17°-Eの方位に並び、検出した範囲での規模は4.95m(3間)である。柱穴の平面形は楕円形を呈し、規模は上端径27～43cm、深さ12～33cmを測る。柱間はSP14-15が1.5m、SP15-16が2.1m、SP16-17が1.35mを測り、SP14、15には15cmの柱痕跡が確認された。SBO2の西側、東側に建物を想定するような柱穴列は確認されていないが、西側については後後に地山まで掘削され段になっているため、この柱列を建物東辺と考えることは可能である。

遺物は、SP15の柱掘方埋土から須恵器と土師器の細片が出土している。但し、SBO2の時期については、SP15と切り合うSP18の柱掘方埋土から12世紀中頃から後半の龍泉窯系青磁碗が出土し、SP15が新、SP18が古である新旧関係から、青磁碗と同時期またはそれ以降と推察される。



第6図 SI01 実測図 (S=1:60)



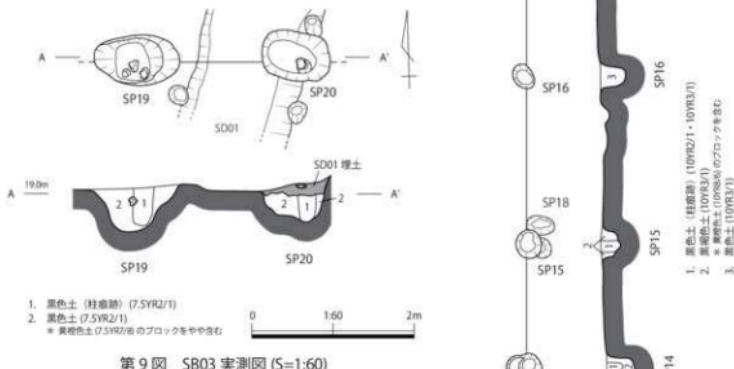
第7図 SB01 実測図 (S=1:60)

**SB03 (第9・10図)**

SB03は、調査区南端で検出した建物跡である。梢円形の柱穴がN-89°Eの方位に並び、検出面標高は18.56～18.84mを測る。柱穴の規模は、SP19が長径1.07m、短径63cm、深さ57cm、SP20が長径88cm、短径60cm、深さ57cmを測り、SP19で22cm、SP20で24cmの柱痕跡を確認している。柱間は1.96mである。柱穴内から根固めに使用された直径10～15cm程度の礫が出土している。柱穴の掘り方埋土は、両柱穴とも黄橙色土を含む黒色土であり、SP20の上方には後述するSD01の埋土が存在し、SP20が古、SD01が新という新旧関係である。

遺物は、柱掘方埋土から土師器と須恵器の破片が出土している。第10図-1は、SP20の柱掘方埋土から出土した土師器の环の口縁部である。内外面共風化しており、調整は不明である。

この柱穴列は南側調査区外へ続く建物北辺と考えられ、柱穴の平面形が楕円形を呈し、柱間寸法が2m弱であることから、近世の建物跡と思われる。



#### SD01 (第11・12図)

SD01は、SB02の西側で検出した溝である。幅1.1~1.8m、深さ10cmを測り、遺構の中央付近はやや西側



第10図 SB03出土遺物実測図(S=1:3)

第8図 SB02実測図(S=1:60)

に広がった平面形を呈している。方位はN-16°Eで、南側では先述したようにSP20の一部を掘り込み、調査区外へ続いている。埋土は褐灰色土に地山ブロックを含む土層で、土層内から土師器や須恵器の細片と一緒に鉄製品が出土している。SB02は、近世の建物跡と考えており、SD01はそれよりも新しい。

第12図-1は、小柄の茎部と思われる。長さ13.6cm、幅1.5cm、厚さ0.9cmを測る。

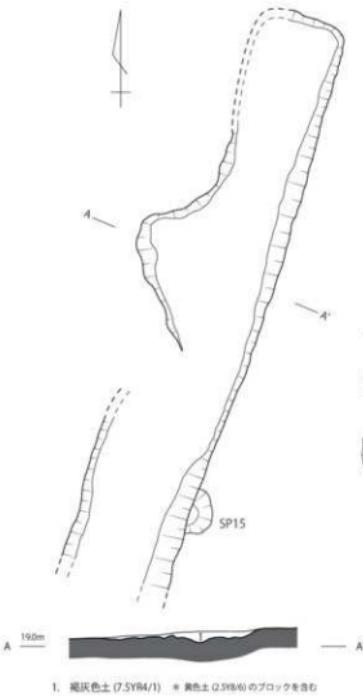
#### SK01 (第13・14図)

SK01は、調査区東端に位置する土坑である。平面形は円形を呈し、北側のみ浅い二段となっている。規模は、南北1.08m、東西1.07m、深さ40cmを測る。遺物は、須恵器、土師器の破片が出土している。

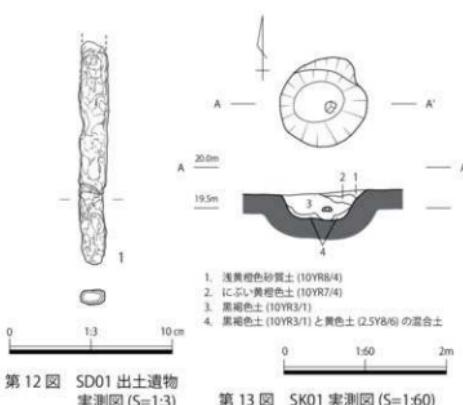
第14図-1、2は須恵器である。1は壺の口縁部である。端部は欠いているが、口縁部が短く外反するもので、出雲国府編年第2~5型式(7世紀末葉~9世紀前葉)である。2は、長頸壺の底部で7世紀~8世紀前半頃と思われる。

#### 包含層出土遺物 (第15図)

第15図は、包含層出土遺物である。1は縄文土器の破片で、口縁部に貼付け突帯が付く深鉢と思われる。晩期の所産と思われる。2~4は須恵器である。2は壺の口縁部である。3は低い高台が底



第11図 SD01実測図(S=1:60)

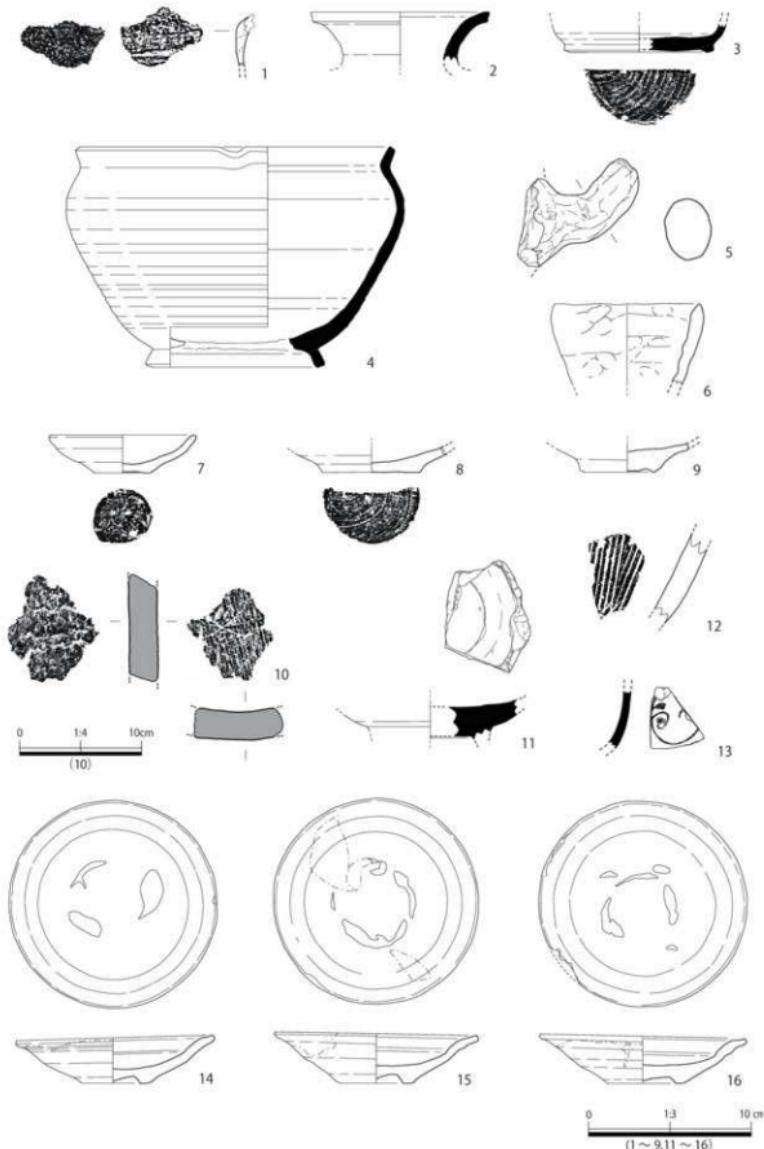
第12図 SD01出土遺物  
実測図(S=1:3)

第13図 SK01実測図(S=1:60)



部外周につく高台付壺である。底部外面に明瞭な回転糸切り痕がみられる。出雲国府第3～5型式と思われる。4は、片口の短頸壺である。口縁は「く」の字状に外反し、底部を意図的に打ち欠いている(図版6参照)。周辺の遺跡でこのような事例は確認されていないが、祭祀的性格のものと思われる。時期は出雲国府第4～5型式。

5は土師器の把手、6は製塩土器である。6の内外面には指頭圧痕がみられる。7～9は、土師器の皿である。7は体部が内湾し、底部に僅かに回転糸切り痕が残る。8、9は底部で、7と同じような器形の皿と思われる。11世紀後半から12世紀代、出雲国府第9～10型式のものである。10は古代の平瓦の破片で、凸面は縄目叩き後丁寧なナデが施され、内面に布目痕が認められる。11は、龍泉窯系青磁碗である。内面には蛇の目状に釉剥ぎが認められ、底部外面は無釉である。大宰府分類のIV類に属し、15世紀頃と思われる。12は擂鉢、13は陶胎染付の碗である。<sup>(9)</sup>13は、九州陶磁編年IV期(1690～1780年)(以下、九陶)に該当する。14～16は、肥前陶器の皿である。いずれも高台が低く、口径約12cmを測る。内面に砂目積みの痕跡が残る。九陶二期(1610～1650年)のものと思われる。この皿は同じような場所から出土し、層位的には7層(褐灰色土)で取り上げたものであるが、7層の土器組成を見る限りこの土層に伴うものとは考えにくく、陶器皿は7層よりも上層から掘り込まれた遺構(遺構は確認できていないがSX01としておく)に伴う可能性が高い。完形であることや火を受けた痕跡がみられることから、火葬墓に伴う可能性が考えられる。



第15図 1区包含層出土遺物実測図 (S=1:3,1:4)

## 第4章 2区の調査

### 第1節 調査の概要 (第16図)

2区は、開発範囲の北東側に位置する。道幅6mの道路部分で、長さ約15m、調査面積は110.3m<sup>2</sup>である。現地表面標高は19.8～20.7mを測り、現状は水田である。調査を行った結果、掘立柱建物跡1棟(SB04)、柱穴列2本(SA01, 02)、自然流路(NR02)を検出した。自然流路(NR02)は、1区北西端で検出した自然流路(NR01)と堆積土層が酷似しており、一連の流路となる可能性が高い。地山面は北西側から南東側に向かって傾斜しており、1区、2区の地山地形からすると、開発予定地の中央に北東から南西への谷が存在していたと判断される。また、その谷は開発範囲北側に所在する溜池から続くものと思われる。

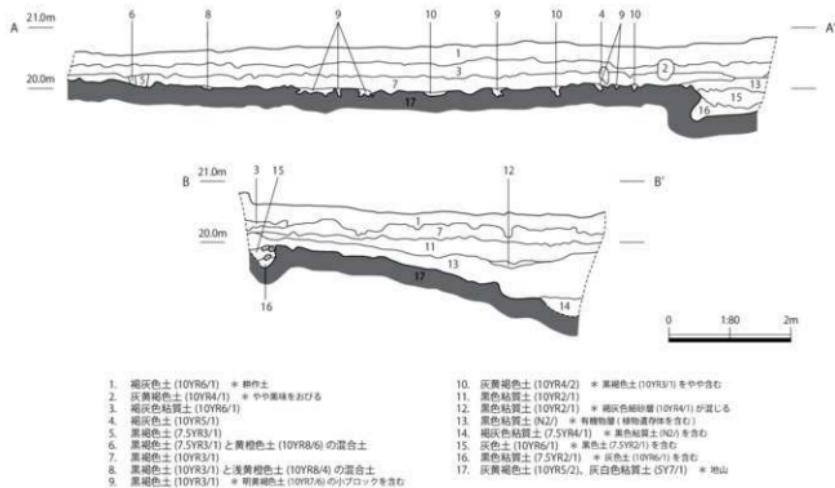


第16図 2区遺構全体図 (S=1:150)

### 第2節 基本層序 (第17図)

第17図は、2区の土層断面である。基本的な層序は1区と同様であり、上層から耕作土、褐灰色

粘質土（3層）、黒褐色土（7層）、地山となる。この2区の3層と7層は、1区の7層と8層と同層で、1区と同じように古代の遺物が多く出土している。調査区東側にはNRO2の堆積が確認される。11～16層はNRO2の埋土で、黒色の粘質土を主体とする。これらの土層は無遺物層である。11層上面で遺物を確認しているが、7層に由来するものと考えられる。2区で検出した遺構は、谷が埋まり、地形がフラットになった段階でのものと捉えている。



第17図 2区土層断面図 (S=1:80)

### 第3節 遺構と遺物

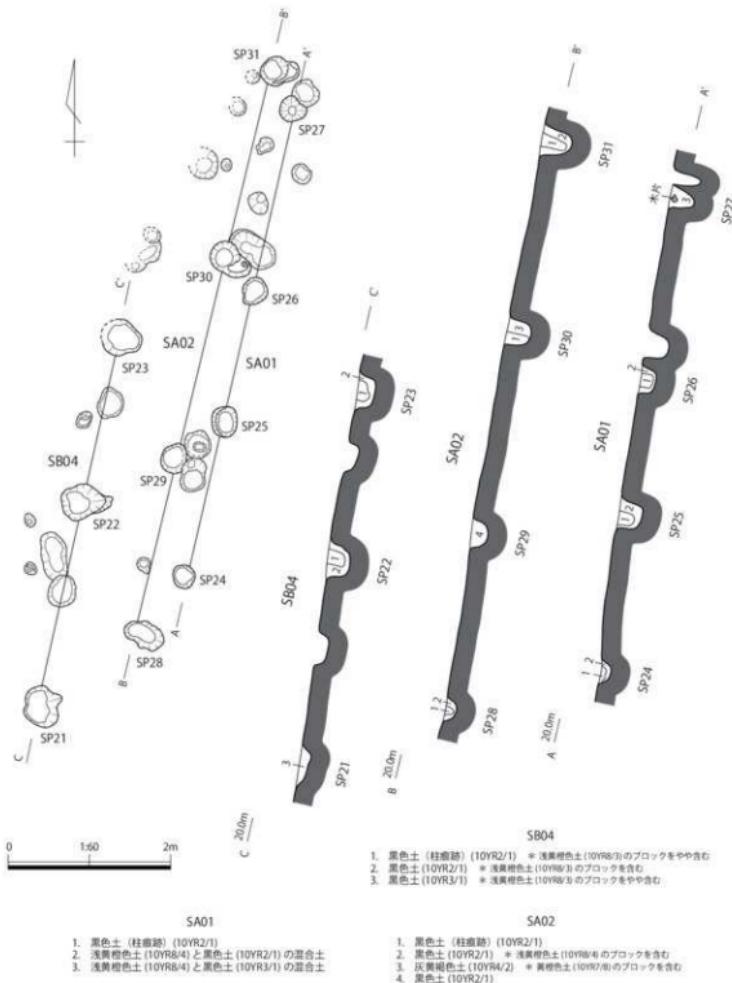
#### SB04 (第18・19図)

SB04は調査区の西側に位置し、検出面標高19.55～19.94mを測る。柱穴を3個しか検出していないが、西側に続く建物跡の可能性があることからSBとした。検出した範囲での規模は4.55m(2間)、方位はN-11°-Eである。柱穴の平面形は梢円形を呈し、上端径45～62cm、深さ11～26cmを測る。SP22で17cm、SP23で20cmの柱痕跡を確認している。柱間はSP21-22が2.6m、SP22-23が2.05mである。遺物は柱掘方埋土から土師器片、須恵器片が出土し、土師器片のなかに赤彩が施されたものが確認されたが、小片のため実測できなかった。

第19図-1、2は、SP39から出土した須恵器である。1は体部が丸みを持ち、口縁端部が屈曲する杯である。出雲国府第2～5型式と思われる。2は底部外周に高台が付く皿で、出雲国府第4～5型式である。

#### SA01 (第18・19図)

SA01は調査区西側に位置し、検出面標高19.64～20.15mを測る。柱穴4個がN-14°-Eの方位に



第18図 SB04・SA01・SA02 実測図 (S=1:60)

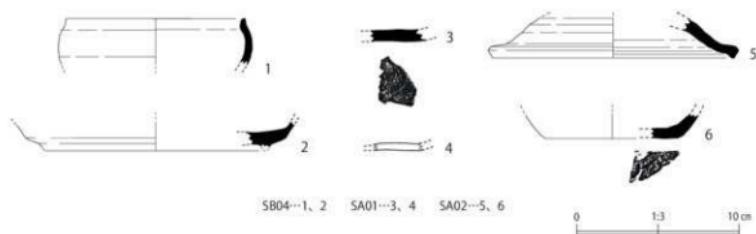
並び、検出した範囲での規模は 5.8m（3間）である。柱穴の平面形は円形及び橢円形を呈し、上端径 28~37cm、深さ 11~30cm を測る。SP25 で 16cm、SP26 で 17cm の柱痕跡を確認している。柱間は SP24-25 が 1.85m、SP25-26 が 1.75m、SP26-27 が 2.2m である。遺物は、柱掘方埋土から土師器片、須恵器片が出土している。

第19図-3、4はSP25から出土している。3は須恵器の环の底部で、回転糸切り痕が残る。4は薄手で、外面に糸切り痕がみられないことから中世後半以降の京都系土師器の底部と考えられる。

#### SA02(第18・19図)

SA02はSA01の西側に位置し、検出面標高19.60～19.94mを測る。柱穴4個の方位はN-14°Eで、SA01と同じである。柱穴の平面形は楕円形を呈し、上端径37～53cm、深さ17～38cmを測る。SP30で12cm、SP31で16cmの柱痕跡を確認している。検出した範囲での規模は7.08m(3間)、柱間はSP28-29が2.18m、SP29-30が2.45m、SP30-31が2.45mを測る。SA01、02の新旧関係はわからないが、作り替えられたものと判断され、また、SB04が建物跡とするならば、それに関連する遺構の可能性が考えられる。遺物は、SP31の柱痕跡から土師器の細片が、SP30、31の柱掘方埋土から土師器片、須恵器片が出土している。

第19図-5、6は、SP30から出土した須恵器である。5は口縁端部がS字状を呈する蓋で、出雲国府第4～5型式と思われる。6は环の底部で、僅かに回転糸切り痕が認められる。出雲国府第3型式以降と思われる。遺物のなかには図化出来なかったが、SA01から出土した第19図-4と同じような京都系土師器の破片が確認され、SA01と時期差がないと判断される。

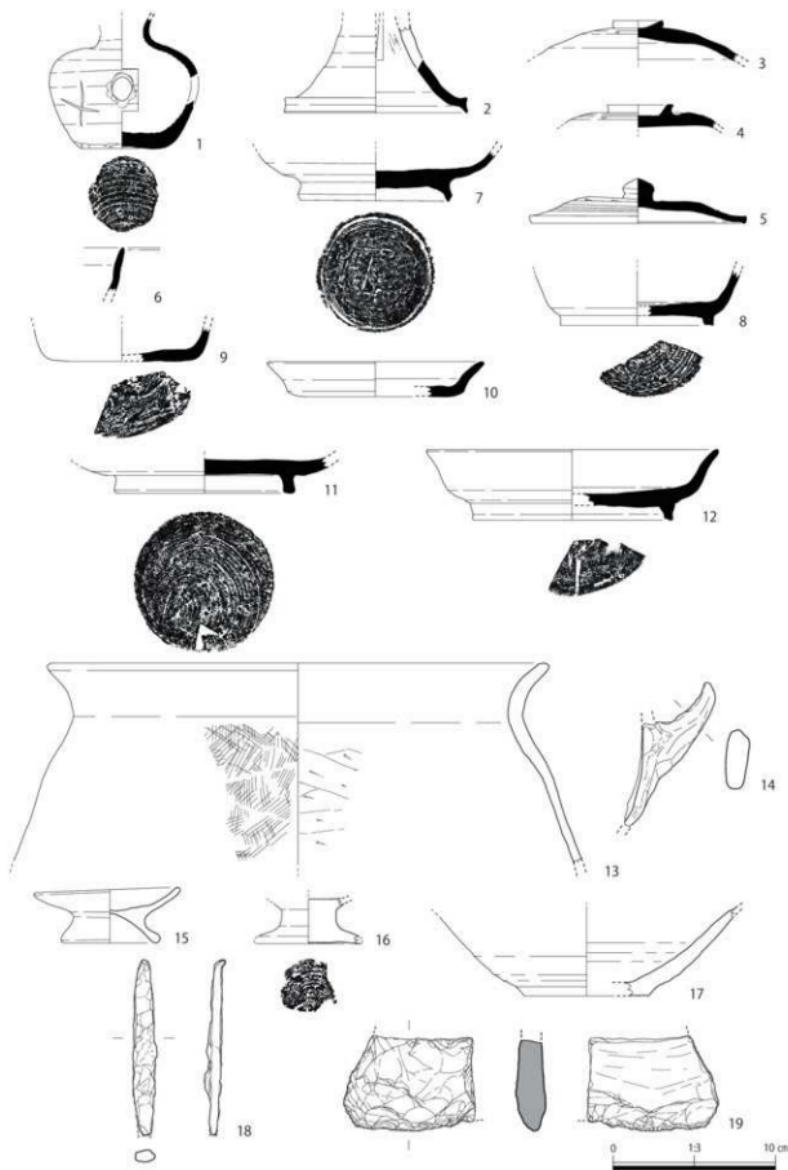


第19図 SB04・SA01・SA02 出土遺物実測図 (S=1:3)

#### 包含層出土遺物(第20・21図)

第20図の1～12は、須恵器である。1は壺で、体部外面にヘラ記号が施され、底部外面は静止糸切りである。出雲6～8期に相当する。2は、高環の脚部である。透かしが切れ目となるものと思われ、出雲6期にあたる。

3、4は輪状つまみの蓋である。3は出雲国府第1型式、4は出雲国府第5型式に相当すると思われる。5は宝珠つまみの蓋で、口縁端部がわずかに屈曲する。出雲国府第4～5型式である。6は体部が直線的に立ち上がる环の口縁で、内外面に炭化物が付着している。7は壺の底部で、高台外面は回転糸切り後ナデを施す。8は、高台付环の底部である。底部外表面は回転糸切り後未調整で、高台が底部端部に付く。出雲国府第3～5型式と思われる。9は、無高台环の底部である。10は無高台の皿で、底部から口縁に向かってやや外反する。出雲国府第4～5型式に相当する。11、12は、高台付皿である。11の底部外面には明瞭な回転糸切り痕がみえる。12は口縁部が外反し、底部外面に回転

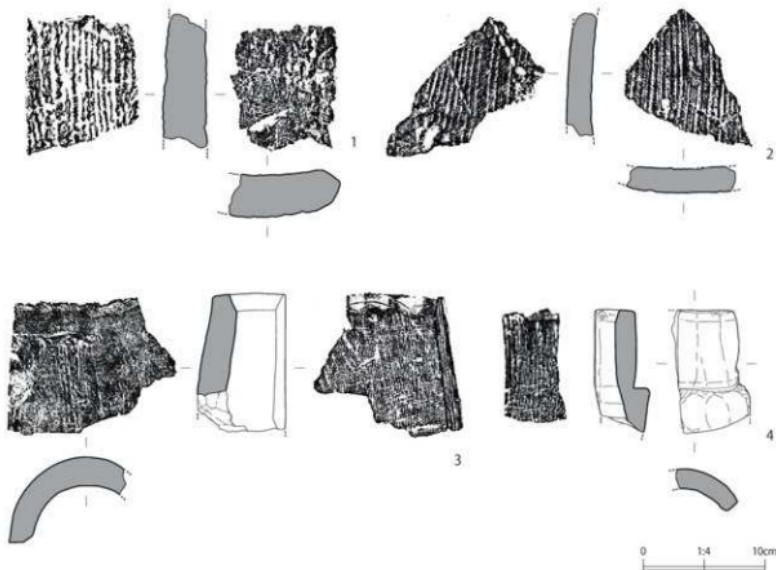


第20図 2区包含層出土遺物実測図① (S=1:3)

糸切り後ナデを施している。内面が滑らかで、硯に転用したものと思われる。出雲国府第4～5型式に相当する。

13～17は、土師器である。13は、甕である。内面にヘラケズリ、外面にハケ目を施している。14は、把手である。15は、足高台付皿である。体部は丸く立ち上がり、高台は低い。出雲国府第8型式に相当する。16は柱状高台付皿の台部で、出雲国府第9～10型式である。17は、無高台の坏である。体部はやや丸みをおび、外方向に開く。11～12世紀代と思われる。18は鉢で、全長10.8cm、厚さ0.7cmを測る。茎をやや欠いている。19は、撥型の打製石斧である。

第21図の1～4は、古代瓦である。これらの瓦は、山代郷南新造院に瓦を供給していたとされる小無田II遺跡の瓦と同様なものと考えられるが、数が少ないとから流れ込みによるものと思われる。1は平瓦で、凸面に繩目叩き、凹面に布目痕が残る。焼成はやや軟質である。2も平瓦である。内外面共に工具によるナデを施し、内面には僅かに布目痕が残る。離れ砂が付着している。3は丸瓦で、外面は繩目叩き後ナデ調整、内面には布目痕がみられる。4は、丸瓦の玉縁部である。内面に布目痕が残り、外面は丁寧なナデ調整である。



第21図 2区包含層出土遺物実測図② (S=1:4)

## 第5章 3区の調査

### 第1節 調査の概要 (第22図)

3区は、開発範囲の北西側に位置する調査区で、調査面積34.2m<sup>2</sup>を測る。現地表面標高は、20.6～20.8mを測り、北西側から南東側に向かって緩やかに傾斜している。表土を重機掘削し、その後人力による掘削、調査を行った。遺構は地山面から検出し、掘立柱建物跡3棟(SB05～07)、土坑1基(SK02)、溝1本(SD02)、不明遺構(SX02)を検出している。SB06、07は、検出状況からSD02に切られしており、また、土層断面からもSB06、07が古、SD02が新という新旧関係となる。

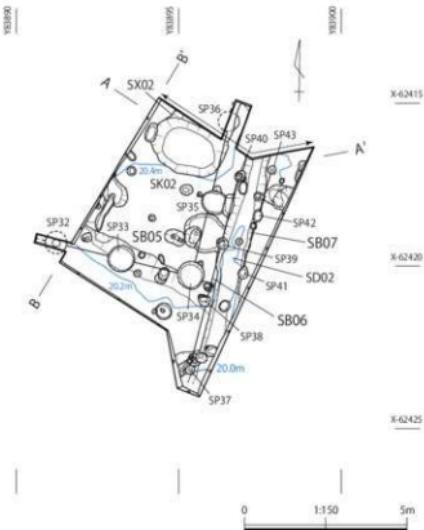
2区と3区は隣接する調査区ではあるが、約6mの距離があり、共通する遺構を抽出することができなかった。

遺物は、須恵器、土師器、中世陶磁器、近世陶器、瓦、金属製品、石製品が出土している。

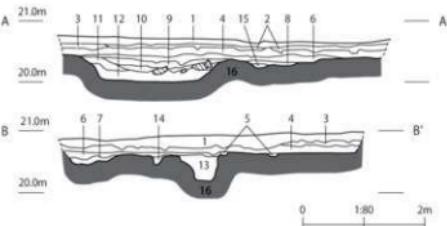
### 第2節 基本層序 (第23図)

第23図は、3区の土層断面である。3区は開発範囲の変更により、調査範囲が北側と南側に拡張されている。北側については拡張前の土層断面である。

地表面下25～50cmの比較的浅い位置で地山に達し、現地表面と同様に北西側から南東端に向かって緩やかに傾斜している。地山面標高は、20.00～20.45mを測る。耕作土の下層には灰黄褐色土(2、3層)や褐灰色土(4層)が堆積し、これらの土層は調査区全体で確認された。6層(黄灰色土と黄橙色土の混合土)や7層(褐灰色土)は、地山面上に部分的にみられる土層である。2～4、6、



第22図 3区遺構全体図 (S=1:150)



1. 灰黄褐色土 (10YR4/2) \*耕作土
2. 灰黄褐色土 (10YR5/2)
3. 灰黄褐色土 (10YR5/2) \*明黄褐色土 (10YR7/6)を多く含む
4. 褐灰色土 (10YR5/7)
5. 褐灰色土 (10YR5/7)
6. 灰灰褐色土 (2SYR5/1)と黄褐色土 (10YR8/8)の混合土
7. 黄灰色土 (7SYR4/1) \*明黄褐色土 (10YR7/6)をわずかに含む
8. 褐色土 (Y6/1)
9. 褐灰色土 (7SYR4/1) \*明黄褐色土 (10YR7/6)を含む
10. 褐灰色土 (10YR4/1)
11. 褐灰色土 (10YR5/1) \*明黄褐色土 (10YR7/6)、黄褐色土 (10YR7/8)を多く含む
12. 褐灰色土 (10YR4/1)と明黄褐色土 (10YR7/6)の混合土
13. 褐灰色土 (10YR4/1) \*明黄褐色土 (10YR7/6)を含む
14. 褐灰色土 (10YR4/1) \*明黄褐色土 (10YR7/6)を含む
15. 黑褐色土 (7SYR3/1)
16. 黑褐色土 (7SYR3/1) \*地山

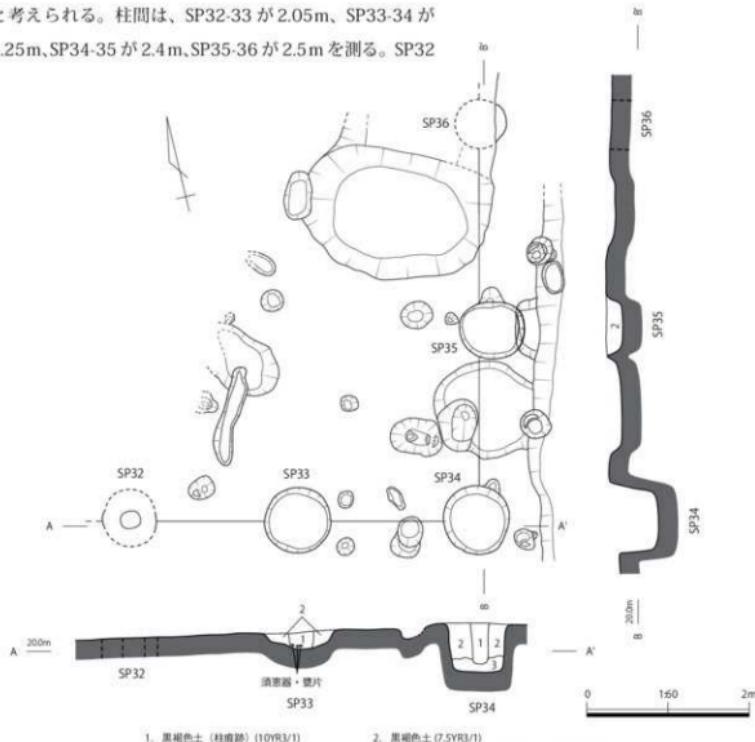
第23図 3区土層断面図 (S=1:80)

7層からは近世陶磁器、石製品が出土しており、近世以降の堆積土と判断される。5層は、6層上面から掘られた遺構埋土で近世以降と捉える。8層（褐灰色土）はSD02の埋土、15層はSB06に伴うSP40の埋土であり、新旧関係が確認され、SD02が新、SB06が古である。9、10層はSX02の埋土、11、12層はSK02の埋土である。

### 第3節 遺構と遺物

#### SB05（第24・25図）

SB05の検出面標高は20.16～20.34mを測る。調査区北西隅に柱穴が確認できないことから、南北を桁行とする建物と考えられるが、規模については桁行2間（4.9m）以上、梁間2間（4.3m）以上としか言えない。柱穴を5個検出しているが、うち2個（SP32・36）は調査区外であることから、検出のみで掘削は行っていない。柱穴の規模は、上端径65～82cm、深さはSP33が21cm、SP35が21cm、SP34は60cmを測る。これらの柱穴は深さが浅いことから、本来の機能面は削平されていると考えられる。柱間は、SP32-33が2.05m、SP33-34が2.25m、SP34-35が2.4m、SP35-36が2.5mを測る。SP32



1. 黒褐色土（柱痕跡）(10YR3/1)  
\* 黄褐色土(10YR7/6)をわずかに含む
2. 黒褐色土(7.5YR3/1)  
\* 黄褐色土(10YR7/6)と灰白色土(2.5Y8/1)を多く含む
3. 黑褐色土(7.5YR3/1)と黄褐色土(10YR7/6)と灰白色土(2.5Y8/1)の混合土

第24図 SB05 実測図 (S=1:60)

で24cm、SP33で27cm、SP34で22cmの柱痕跡を確認し、SP33の底面、柱痕跡の下方から須恵器の表片が出土している。数個の表片が意図的に置かれたような状況で、柱の傾き等の調整に置かれたものと推測される。柱穴掘方埋土は、黒色土と黄褐色土、灰白色土の斑層である。桁行の方位は、N-14°-Eである。他に遺物は柱掘方埋土から土師器、須恵器の破片が出土している。

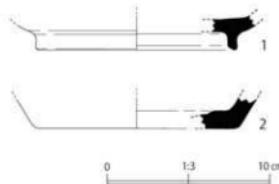
第25図1、2は、SP34から出土した高台付皿の底部である。出雲国府第3～5型式頃のものと思われる。2は、壺の底部である。灰白色を呈し、胎土や調整から平安時代以降のものと思われる。

#### SB06（第26図）

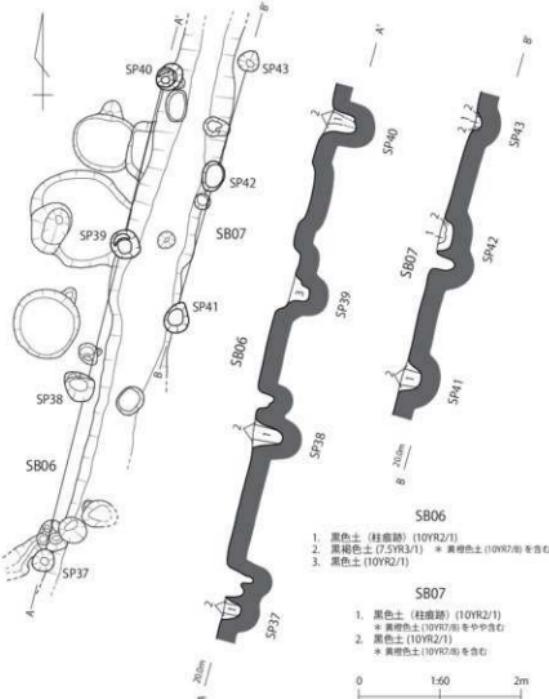
SB06はSB05の東側に位置し、検出面標高は20.00～20.33mを測る。柱穴4個がN-15°-Eの方位に並び、西側に対応するような柱穴がみられないことから、東側に展開する南北棟の掘立柱建物跡の可能性がある。柱穴の平面形は円形や楕円形を呈し、上端径30～38cm、深さ29～38cmを測る。SP37で13cm、SP38で16cm、SP40で10cmの柱痕跡を確認している。柱間はSP37-38が2.18m、SP38-39が1.8m、SP39-40が2.12mである。遺物は、柱掘方埋土から古代と思われる須恵器、土師器の細片が出土している。

#### SB07（第26・27図）

SB07はSB06の東側に位置し、検出面標高は20.33～20.35mを測る。3個の柱穴がN-15°-Eの方位に並び、西側に対応するような柱穴がみられないことから、東側に展開する掘立柱建物跡の可能性がある。また、SB06と隣接し、建て替えが行われたと思われる。柱穴の平面形は円形や楕



第25図 SB05出土遺物実測図 (S=1:3)



第26図 SB06・SB07実測図 (S=1:60)

円形を呈し、上端径 27 ~ 40cm、深さ 11 ~ 23cm、柱間は SP41-42 が 1.8m、SP42-43 が 1.5m を測る。SP43 で 13cm の柱痕跡を確認している。遺物は、SP41 の柱掘方埋土から製塙土器が出土している。

第 27 図-1 は、製塙土器である。口唇部が丸く肥厚し、内外面に指頭圧痕がみえる。

#### SK02・SX02 (第 28・29 図)

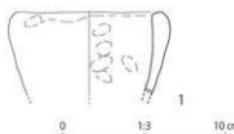
SK02 は、調査区北側に位置する楕円形の土坑である。検出面標高は 20.40m、長径 2.25m、短径 1.38m、深さ 35cm を測る。追加調査により、土坑の北側は段状となり、調査区外へ続く遺構 SX02 が確認された。土層断面の 1、2 層は SX02 の埋土、3、4 層が SK02 の埋土であることから、SK02 が古、SX02 が新である新旧関係が確認される。3 層の上面から大きさ 25 ~ 40cm の角礫が数個出土し、SK01 埋没後 SX02 を造る際に意図的に置かれた可能性も考えられる。遺物は、3、4 層から土師器、須恵器の破片が出土している。

第 29 図-1 は、須恵器の壺の底部に近い体部と思われる。外面に回転ナデ調整を施している。2 は、京都系土師器皿の口縁部である。口縁部付近でやや段をなし、口唇部は外反する。中世後半以降のものと思われる。

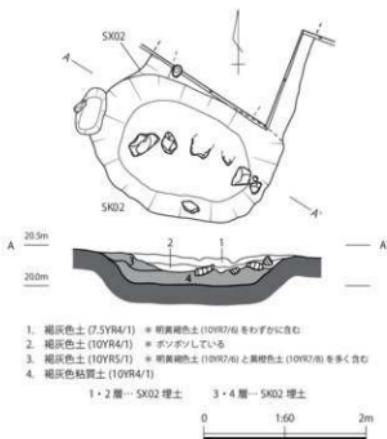
#### SD02 (第 30・31・32 図)

SD02 は、調査区東側に位置し、調査区外へ続いている。検出面標高は 20.05 ~ 20.32m、規模は長さ 7.3m、幅 68 ~ 85cm、深さ 8 ~ 20cm を測る。底面標高は、北東側で 20.3m、南西側で 20.0m を測り、北東側から南東側に向かって傾斜している。方位は N-13°-E である。埋土 1 層（褐灰色土）から、10 ~ 20cm 程度の角礫が出土し、特に中央付近に多くみられた。遺物は、須恵器、土師器、中近世の陶磁器、鉄製品、瓦が出土している。

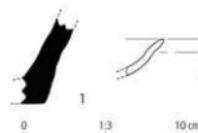
第 31 図-1 は、須恵器の壺である。体部が直線的に立ち上がるるもので、出雲国府第 3 ~ 5 型式と思われる。2 は、土師器の皿の底部である。薄手で、外面に回転糸切り痕がみられる。3 も土師器の皿である。口径 9.0cm の小形のもので、外面に指頭圧痕が確認される。また、内面の一部に炭化物の付着が認められ、灯明皿として使用されていたのかもしれない。4 は、龍泉窯系青磁碗である。高台外、疊付けは無釉で、内面に文様が施されている。15 世紀頃のものである。5 は中国青花の皿で、型



第 27 図 SB07 出土遺物実測図 (S=1:3)



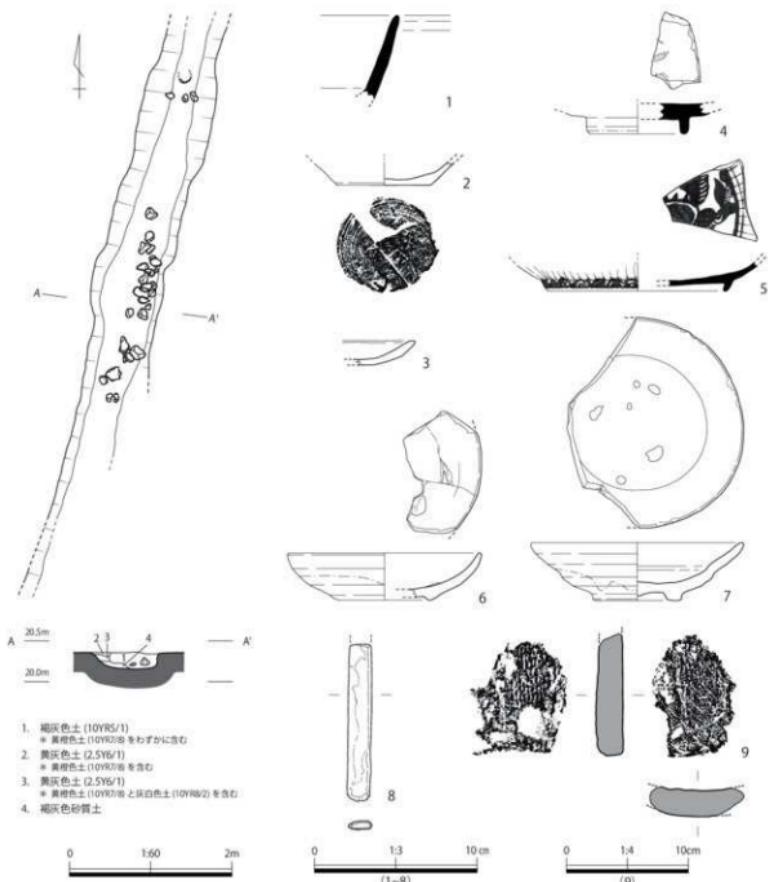
第 28 図 SK02・SX02 実測図 (S=1:60)



第 29 図 SK02 出土遺物実測図 (S=1:3)

作り成形を施している。16世紀中頃～17世紀初め頃のものである。6は、肥前陶器の皿である。胴部下半から高台は露胎で、内面に胎土目が確認される。九陶1期（1580～1610年）のものである。7も肥前陶器の皿である。内面に胎土目が認められ、九陶1期のものである。8は、小柄の茎である。9は、古代の平瓦である。外面に縄目叩き痕が、内面に布目痕が確認される。

SD02は、出土遺物から近世の溝と考えられる。3区の調査成果図を、明治22年の当地域周辺の字切図（第32図）に正確に当てはめることはできないが、「光泉寺」と「沖田」との字境に位置していることが確認できることから、SD02は字境の溝と推察される。



第30図 SD02実測図 (S=1:60)

第31図 SD02出土遺物実測図 (S=1:3, 1:4)

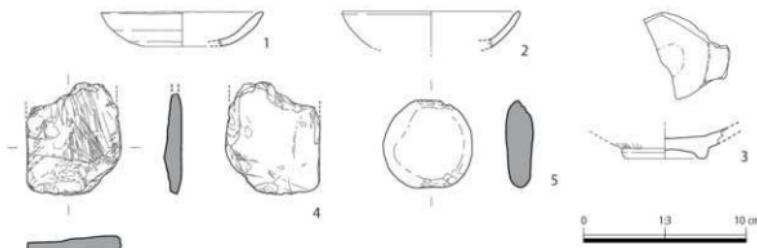


第32図 明治22年光泉寺遺跡周辺の字切図

\* 資料提供=松江市歴史まちづくり部史料編纂課

## 包含層出土遺物（第33図）

第33図は、包含層の出土遺物である。1は、土師器の皿である。2、3は肥前陶器の皿である。2は口縁部、3は皿の底部である。3は内面に銅線釉が掛かり、見込みには蛇の目釉剥ぎ痕が残る。九陶III～IV期（1650～1780年）のものである。4は、砥石である。表面に線状の擦痕が認められ、裏面は滑らかである。5は、石錘である。両端に加工が施され、やや凹んでいる。



第33図 3区包含層出土遺物実測図 (S=1:3)

## 【3】

- (6) 本遺跡西側で近世以降の柱穴が確認されている遺跡は、中竹矢遺跡（第II調査区）がある。建物の復元に至ってはいないが、直径1m前後の楕円形状の柱穴が検出され、近世初期の時期が与えられている。また、松江歴史探検隊に伴う松江城下町遺跡（00町 297番地）発掘調査では、南屋敷第4遺構面のSB03において、擬柱式に伴う柱穴跡が直径約1m前後、柱間寸法2mであり、SB03の形態とはほぼ同じである。
- (7) 本著で報告する出雲国府編年の時期区分は以下のとおりである。
- |                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| 第1 型式・・7世紀後葉          | 第6 型式・・9世紀中葉～後葉      |
| 第2 型式・・7世紀末葉～8世紀第1四半期 | 第7 型式・・10世紀前半        |
| 第3 型式・・8世紀第2四半期       | 第8 型式・・10世紀後半～11世紀前半 |
| 第4 型式・・8世紀第3四半期～第4四半期 | 第9 型式・・11世紀後半～12世紀前半 |
| 第5 型式・・8世紀末葉～9世紀前葉    | 第10 型式・・12世紀後半       |
- (8) 本書で報告する肥前陶器の編年については、「大宰府条跡 XV. 陶器部分類図」を参考にし、島根県教育庁 理藏文化財調査センター 守岡正司氏にご教示頂いた。
- (9) 本書で報告する肥前陶器の時期区分は以下のとおりである。なお、本文中では「九陶〇期」と略号で表記している。
- I期・・1580～1610年
  - II期・・1610～1650年
  - III期・・1650～1690年
  - IV期・・1690～1780年
- (10) 第20図-1、2の時期について、出雲国府編年と並行する時期も含まれているが、出雲編年（大谷編年）を使用している。

## 第6章 総括

今回の光泉寺遺跡の調査では、円形の建物跡1棟(SI01)、掘立柱建物跡7棟(SB01～07)、柱穴列2本(SA01・02)、土坑2基(SK01・02)、溝2本(SD01・02)と多数のピット、自然流路(NR01・02)を検出した。遺物は、古代の須恵器、土師器を主体に、中・近世の陶磁器、金属製品、石製品が出土している。ここでは、遺構の変遷と遺物の様相を記述し、光泉寺遺跡周辺の遺跡との関連についても考察する。

### 第1節 遺構について

ここでは、今回の調査で検出した遺構の変遷について述べてみたい。

**縄文時代～弥生時代：**1区で検出したSI01は、円形の建物跡である。調査成果ではこの建物跡が堅穴建物なのか平地建物なのかは判断できなかった。また、この建物跡に伴う出土遺物がないことから明確な時期は不明である。ただ、出土遺物のなかに弥生土器がないことや、縄文土器や石製品が出土することから推察すると、縄文時代の建物跡である可能性が大きいようと思われる。

弥生時代の遺構は確認していないが、意宇平野に所在する大坪遺跡、布田遺跡では住居跡が、意宇平野北縁に位置する中竹矢遺跡では粘土採掘坑が検出され、周辺では生活の痕跡が確認されている。

**古墳時代：**古墳時代の遺構は検出していないが、2区の7層(黒褐色土)から後期の須恵器の高环や鏡が出土している。

**古代(奈良時代～平安時代)：**古代の遺物が全体の大半を占めているにも関わらず、明確な遺構は確認していない。時期不明とした柱穴のなかにこの時期のものがあることも考えられるが、建物の復元には至ってはいない。遺物のなかには転用硯や瓦があり、地形から推察すると、本遺跡南東側200m(寺域想定線までは約130m)に所在する山代郷南新造院跡との関連性が考えられる(第35図参照)。山代郷南新造院跡の寺域は東西約103m、南北約150mと想定されており、当地はその範囲に含まれてはいないが、寺域周辺における関連施設が存在した地域であった可能性もある。

**中世(鎌倉時代～室町時代)：**本遺跡で確認されたSB02・04～07、SA01・02は、中世の遺構と捉えている。これらの遺構の南北方位はN-11°～17°-Eを示し、特にSB02以外はN-11°～15°-Eとほぼ同じ方位である。SB02は、切り合う柱穴の掘方埋土から12世紀中頃から後半の龍泉窯系青磁碗が出土しているため、それ以降の時期が与えられる。SB04～07、SA01・02は、隣接する山代沖田遺跡と同じ低丘陵に位置し、また、山代沖田遺跡の中世後半の建物跡と方位が同じであることから、同一の区画域に建てられた建物の可能性が考えられる。そのなかのSB05は、南北軸を桁行とする建物跡である。柱穴径の割に柱痕が小さく、広い床面積をもつ建物とは考えにくいことから、小規模な建物、つまり倉庫や蔵?のような建物と推察される。

**近世(江戸時代)：**近世の遺構は、SB03、SD01・02である。SD02は、出土遺物から17世紀初め頃に埋没しており、「光泉寺」と「沖田」との字境内に存在することから、寺域を限る溝の可能性が考えられる。

また、1区から出土した完形の肥前陶器の皿3枚は、17世紀初め頃のもので全体が被熱していた。包含層出土遺物として取り上げているが時期的にイレギュラーなものであり、火葬墓（SX01、第4図★地点）に埋納されていた副葬品の可能性を考えている。

ここで、当地の遺跡名の由来となった「光泉寺」という字名に触れておく。管見では光泉寺について記載された文献を知らないが、現在の古志原町にある「亀龍山光泉寺」観音堂が同寺という伝承が残る。古志原には延宝8年（1680年）に奉遷された山代神社が鎮座しており、光泉寺についても同時期に移されたと伝えられている。古志原は江戸時代の初めに開拓され、産土神社がなかったために、山代郷社として、もと神名権山（茶臼山）に鎮座していた山代神社を勧請したものである。<sup>(13)</sup>近世の遺物は初頭のものが7割を占め、17世紀中頃以降のものが少ないと、「光泉寺」の伝承を裏付ける成果であろう。<sup>(14)</sup>

## 第2節 出土遺物の様相（表1）

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品、金属製品である。破片が大半を占め、完形を成すものは限られている。柱穴から出土した遺物は、柱掘方埋土のものが多く、柱痕跡のものは細片であり数も少ない。表1に出土土器の組成図を示している。この図は、総出土点数（1422点）のうち、時期不明なもの（593点）を除いた点数について、時期毎に区分したものである。全体の92%を古代の須恵器、土師器で占め、次に中世、近世の土師器や陶磁器となっているが数は少ない。以下では、時代ごとにその様相をまとめておく。

縄文時代の土器は、晚期頃の突堤文土器が1点出土している。意宇平野に所在する上小紋遺跡や大坪遺跡、本遺跡東側に位置する柳塙遺跡からも同時期の縄文土器が出土していることから、周辺に居住域が存在した可能性が考えられる。他に、打製石斧や石錘が出土している。

弥生土器は確認していない。また、古墳時代の遺物は少なく、後期末の須恵器の高环や縫が出土したにすぎない。出土遺物のなかに甕や壺の煮炊具や、貯蔵具などの生活道具がみられないことは注目される。

出土遺物の多くは古代の遺物である。土師器、須恵器、瓦が出土し、須恵器がその7割を占めている。なかでも8世紀後半から9世紀前葉の須恵器の蓋や环、皿、短頸壺や、土師器の甕や环が多く、須恵器のなかには硯に転用された皿や墨痕のような痕跡が残る环がみられた。この他に注目される遺物として、包含層出土遺物として取り上げた短頸壺がある。底部を焼成後意図的に打ち欠いており、正位の状態で出土していることから、土坑に埋納されていた可能性がある。明確な意図はわからないが祭祀的な意味をもつものと推察される。

古代瓦は、平瓦や丸瓦が18点出土している。これらの瓦は土器と同様に流れ込みによ

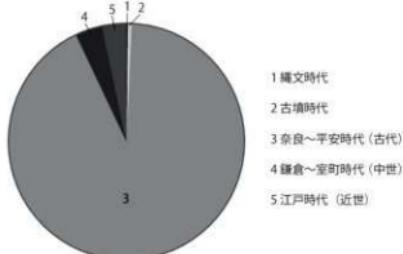


表1 出土土器組成

\* 時期不明の破片は含めていない

るものと考えられる。

土師器では、环や無高台の皿、足高高台付皿などが出土し、時期的には古代後半が多い。环の破片には赤彩が施されたものもみられた。

中世の遺物は、陶磁器が出土している。陶磁器は、11～12世紀や15～16世紀頃の龍泉窯系青磁碗や青花の皿、白磁などの貿易陶磁器である。また、16世紀末頃の瀬戸焼の皿が出土しているが、13～14世紀のものは確認していない。他に、京都系の土師器皿が出土している。明確な時期はわからないが、16世紀後半以降と捉えている。

近世では、肥前陶器、瓦などが出土している。前述したように近世初頭のものが多く、17世紀中頃以降のものは少ない。

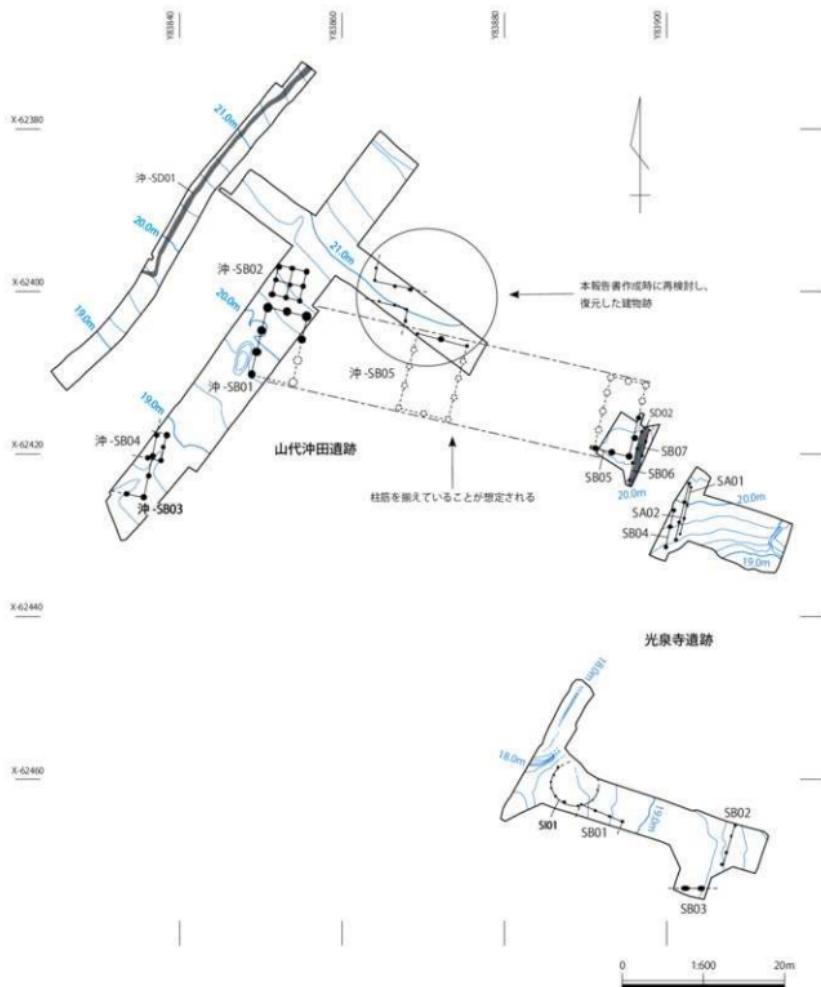
### 第3節 結語（34・35図、表2）

以上、遺構と遺物の様相と変遷について述べてきた。ここでは茶臼山南西裾野における主要な遺構を抽出し、周辺の遺跡とも比較しながら、古代から中世、近世の実態に迫り結語としたい。

光泉寺遺跡では古代の遺構は特定できなかったが、出土遺物の9割は古代の遺物が占め、なかには山代郷南新造院跡の瓦や転用硯と思われるものがみられた。本遺跡南東側200mには山代郷南新造院跡の中軸線が想定されており、関連遺物が出土したことを積極的に評価するのであれば、遺構としては残りにくいが山代郷南新造院に関係した空間であった可能性を考えてもよいかもしれない。その山代郷南新造院は、8世紀前半、出雲臣弟山が建立した寺院であり、既往の調査によって建物基壇が確認されている。<sup>119</sup>山代大畠遺跡の調査では、寺域南辺を限る溝や総柱建物跡が確認され、その様相が徐々に明らかになってきている。基壇や溝、総柱建物の方位をみるとほぼ同じ方位（N-78°～80°-W）を指向し、規格的な配置が行われている。

他に、周辺には官衙遺跡である山代郷正倉跡や、下黒田遺跡の建物跡が所在している。両遺跡の建物跡の諸特徴は極似し、特に8世紀代後半の総柱建物跡や掘立柱建物跡の主軸方位は、N-3°～10°-Eを示している。山代郷南新造院跡の遺構についても東西軸に対する南北軸は同じような傾きとなり、古代、特に8世紀代に造られた官衙関連施設や寺院は、ほぼ北から東側に10°以内の傾きで規格的に配置されていることがわかる。

なお、出雲市の古志本郷遺跡や浅柄遺跡<sup>120</sup><sup>121</sup>の調査成果をみると、古代の建物の主軸方位は古代山陰道を意識した配置になっていることが指摘されている。古志本郷遺跡では、郡家の政庁の一部と考えられる建物跡が検出され、2時期に分けられている。II期（建設から廃絶が8世紀後葉～9世紀前葉）の遺構が南面しているのに対し、I期（8世紀前半の建設、8世紀中葉～後葉に廃絶）の遺構は北から西側に約33°斜めに配置されている。このI期の建物跡の主軸方位については、不確定ながらも現在の県道多伎江南出雲線が古代山陰道を踏襲している可能性が高いとし、施設の配置に際して山陰道の方位を意識した計画的配置であるとしている。また、古志本郷遺跡から南西2.4kmに位置する浅柄遺跡では、7世紀前半から8世紀代にかけて、3時期、3棟ずつの建物跡が確認されている。これらの建物跡は、周辺地形と無関係な方位に統一され、その角度は古代山陰道の方位と一致していると考えられている。



第34図 光泉寺遺跡・山代沖田遺跡遺構配置図 (S=1:600)

当地では考古学的に古代山陰道の位置は確定していないが、建物の主軸から古代山陰道について触れてみたい。古代山陰道については、中村太一氏や勝部昭氏が詳細に論じている（勝部 1993・中村 1996）。吉志本郷遺跡や浅柄遺跡の指摘を参考にするならば、山代郷正倉跡や下黒田遺跡付近では約80°程度北から西に傾いた道となり、山代郷南新造院跡付近でも遺構と同じような方位の道が推定される。本報告ではこの傾きに最も近い中村氏の推定ルートを第35図に示しているが、今後の調査成

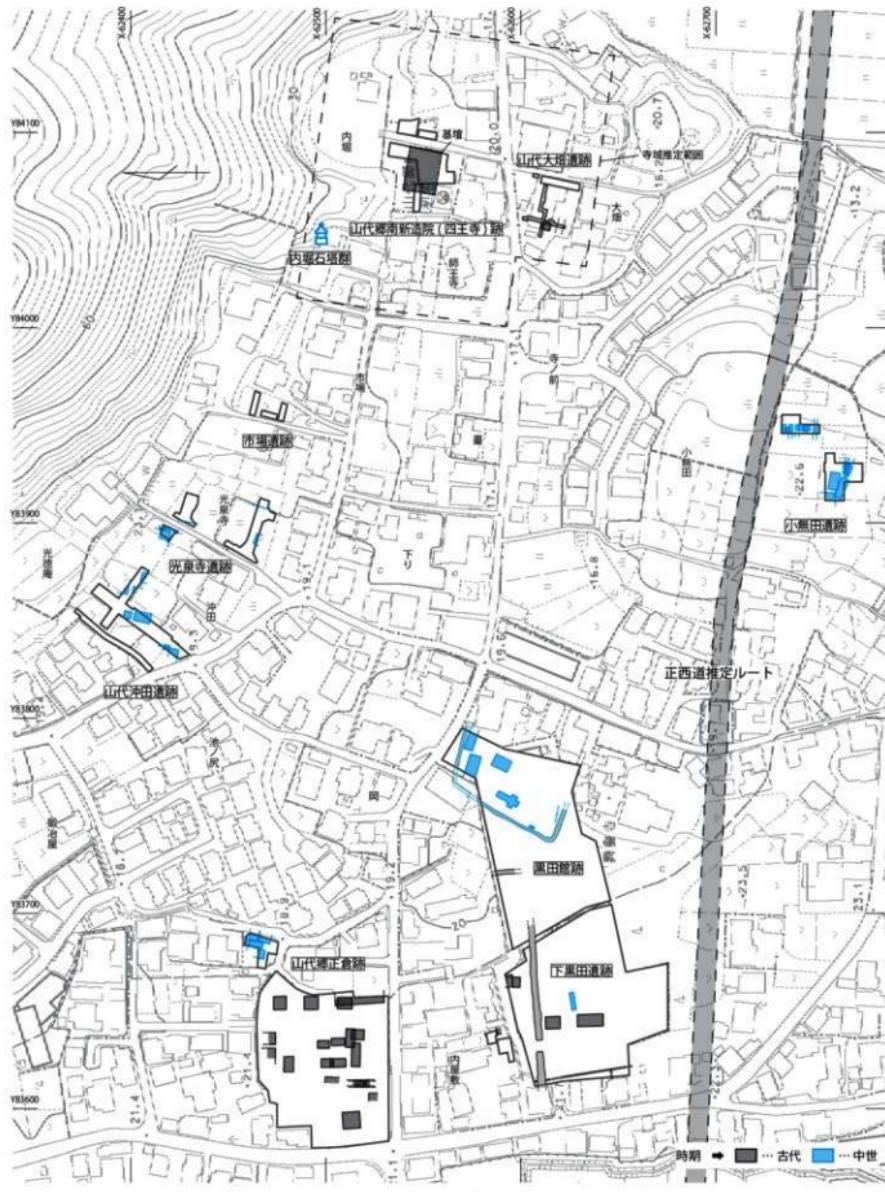
表2 光泉寺遺跡・山代沖田遺跡SB・SA計測表

光泉寺遺跡						山代沖田遺跡						
遺構番号	主軸方向	Pn番号	直角 (m)		柱間	遺構番号	主軸方向	Pn番号	直角 (m)		規格	
			長さ / 直径	深さ					長さ / 直径	深さ		
SB01	N-67°W	SP10	0.28	0.17	18.46	SP10-11-1.95m	N-14°E	SP1	0.9	0.5	19.3	規格
		SP11	0.35	0.08	18.55	SP11-12-1.85m		SP2	1.0	0.7	19.3	
		SP12	0.30	0.08	18.72	SP12-13-1.65m		SP3	1.0	0.6	19.3	
		SP13	0.42	0.27	18.58			SP4	1.1	1.2	19.1	
SB02	N-17°E	SP14	0.14	0.33	19.07	SP14-15-1.90m		SP5	1.0	1.3	19.1	規格
		SP15	0.35	0.22	19.24	SP15-16-2.10m		SP6	1.2	1.2	19.2	
		SP16	0.33	0.29	19.18	SP16-17-1.35m		SP7	1.0			
		SP17	0.27	0.12	19.42			SP8	0.7	0.4	20.1	
SB03	N-89°E	SP19	1.07	0.57	18.53	SP19-20-1.96m		SP9	0.5	0.1	20.5	規格
		SP20	0.88	0.57	18.66	SP20-21-1.96m		SP10	0.7	0.6	20.0	
SB04	N-11°E	SP21	0.51	0.11	19.47	SP21-22-2.60m	N-14°E	SP1	0.5	0.3	20.2	規格
		SP22	0.62	0.26	19.55	SP22-23-2.05m		SP2	0.5	0.2	20.4	
SB05	N-14°E	SP23	0.14	0.22	19.72	SP23-24-2.05m		SP3	0.6	0.2	20.4	
		SP24	0.65			SP24-25-2.05m		SP4	0.6	0.5	19.9	
		SP25	0.82	0.21	20.03	SP25-26-2.25m		SP5	0.6	0.4	20.4	
		SP26	0.83	0.60	19.76	SP26-27-2.40m		SP6	0.6	0.4	20.1	
SB06	N-15°E	SP27	0.80	0.21	20.19	SP27-28-2.40m		SP7	0.6	0.5	20.1	規格
		SP28	—	—	—	SP28-29-2.50m		SP8	0.6	0.5	20.1	
		SP29	0.30	0.29	19.80	SP29-30-2.18m		SP9	0.6	0.5	18.0	
		SP30	0.37	0.38	19.87	SP30-31-2.18m		SP1	0.7	0.2	18.4	
SB07	N-15°E	SP31	0.27	0.33	20.01	SP31-32-2.12m	N-12.5°E	SP2	0.6	0.3	18.3	規格
		SP32	0.38	0.14	19.99	SP32-33-2.12m		SP3	0.7	0.5	18.4	
SA01	N-14°E	SP34	0.40	0.23	20.12	SP34-35-2.18m		SP4	0.6	0.4	18.5	規格
		SP35	0.37	0.17	20.22	SP35-36-2.18m		SP5	0.6	0.4	18.7	
		SP36	0.27	0.11	20.27	SP36-37-2.17m		SP6	0.5	0.2	18.6	
		SP37	0.28	0.11	19.24	SP37-38-2.18m		SP7	0.5	0.2	18.6	
SA02	N-14°E	SP38	0.37	0.30	19.59	SP38-39-2.18m	N-13°E	SP8	0.5	0.1	18.6	規格
		SP39	0.35	0.20	19.80	SP39-40-2.12m		SP9	0.8	0.3	18.6	
SA03	N-14°E	SP40	0.38	0.14	19.99	SP40-41-2.12m		SP1				規格
		SP41	0.40	0.23	20.12	SP41-42-1.80m		SP2				
		SP42	0.37	0.17	20.22	SP42-43-1.47m		SP3				
		SP43	0.27	0.11	20.27	SP43-44-1.47m		SP4				
SA04	N-14°E	SP44	0.28	0.11	19.24	SP44-45-1.95m		SP5				規格
		SP45	0.37	0.30	19.59	SP45-26-1.75m		SP6				
		SP46	0.35	0.20	19.80	SP46-27-2.27m		SP7				
		SP47	0.39	0.19	19.89	SP47-28-2.27m		SP8				
SA05	N-14°E	SP48	0.50	0.17	19.46	SP48-29-2.18m	N-13°E	SP9				規格
		SP49	0.37	0.23	19.64	SP49-30-2.45m		SP1				
		SP50	0.53	0.31	19.71	SP50-31-2.45m		SP2				
		SP51	0.48	0.38	19.78	SP51-32-2.45m		SP3				

果の蓄積とともに更に検証していく必要がある。

次に、中世についてみてみたい。本遺跡で確実な建物跡として復元できる遺構は、建物南東隅を検出した掘立柱建物跡SB05だけである。周辺で検出した柱穴が直径約30~60cmなのに対し、この建物跡を構成する柱穴は65~83cmを測り、比較的規模は大きい。この建物跡は、隣接する山代沖田遺跡のSB01（以下、山代沖田遺跡の遺構には頭に「沖-」を付し区別する）や沖-SB02、沖-SB05と方位が同じである。山代沖田遺跡が中世後半の建物跡であることから、SB05についても同時期の建物の可能性がある。また、SB05と沖-SB01、沖-SB05は建物南辺と北辺が揃っている可能性が高く、規則的に並立して建てられたと考えることも可能である。並立して建てられている点や柱穴の規模の割に比較的小規模な建物となる点から、倉庫と考えられる。また、この建物と同軸の遺構にSA01・02がある。同時期に機能していたものと考えており、建物跡の可能性は排除できないが、これよりも東側に中世の建物跡やピットがなく、屋敷地東辺を限る施設の可能性を考えられる。このほか、同時期の建物跡が黒田館跡や小無田遺跡、市場遺跡で検出されている。黒田館跡は、屋敷境に区画溝を廻らせ建物を配置している。建物の方位は溝と一致する。また、小無田遺跡では区画するような遺構は確認されていないが、同じような方向に建物が配置されている。これらの中世の建物跡の方位は遺跡毎に規格性があるようと思われるが、古代の建物のように周辺の遺跡全体としての統一性はみられない。このことは、7世紀後半以降、律令国家の形成に際して、中央集権的な国家による領域支配が行われていたことが、平安時代末から鎌倉時代にかけて機能していく社会的な流れと関連があるのかもしれない。

最後に、近世の溝(SD02)、火葬墓(SX01)、建物跡(SB03)についても触れておく。これらの遺構は、先述のとおり1680年頃まで当地に存在したと伝えられている「光泉寺」に関係する遺構と考えられ



\* 正西道推定ルートについては、中村圭一「1996年『出雲國土記の宮園記述と道路』」「日本古代国都と計画道路」の「第24回 大坂丘陵の都路推定」を参考にしている。  
\*\* 山代堀内新造院 (Yamada Horin Shinzō-in) の基壇及び寺域の推定範囲は、花谷浩「2014年『山代堀内新造院 (Yamada Horin Shinzō-in) 再考』『出雲合生の各博物館 庄内紀要集4集』の「図3」建物基準開拓地図」、図5 山代堀内新造院跡地推定図」から抜粋して掲載している。

第35図 光泉寺遺跡周辺の遺跡分布図 (S=1:2,500)

る。また、本遺跡の南東側には、中世後半から近世初頭の遺跡と考えられている内堀石塔群が所在し、五輪塔が多数確認されていることから、近くに墓所の存在した可能性があり、遺構の存在も含め寺域の広がりを窺わせる。他に、市場遺跡で内堀石塔群と同時期の遺物や建物跡が検出されていることや、隣接地に「光徳庵」「鍛冶屋」という字名が確認されることから、当時の本遺跡周辺の街並の一端を想像することができる。

以上、茶臼山南西裾野における遺構の変遷を述べてみた。本遺跡では、遺物の出土割合に反して古代の遺構が確認できなかったことは、中世～近世における土地利用に際して遺構面が削平されている可能性を考えた。ただ、そうであるならば古代の遺物の出土点数はもっと少なくてよいはずである。古代の遺物の出土状況に重点に置けば、遺構としては残りにくいが山代郷南新造院に関係した空間であった可能性を考えてもよいかもしれない。

近年の調査によって新たな成果が得られていることは注目され、今後の調査資料の蓄積によって、古代から中世における様相が更に明らかになることを期待したい。

#### 【註】

- (1) 「山云弥生の森博物館 研究紀要第4集」のなかで花谷氏は、山代郷南新造院の寺域について東西約103m、南北約150mの見解を示されている。
- (2) 平成23年(2011年) 大阪公民館「わがとこ開きある記 誰りつぐ大庭の歴史」を参考にしている。
- (3) 山代神社の石碑(古志原開拓元祖之碑)には、古志原開拓の歴史が記されている。寛文8年(1668年)以降、大根島などの人々によって開拓されたと記されている。
- (4) 山代神社の山積石には、「豈宇宙間山代郷として、もと神名植山(今の白山山)の山頂に鎮座す。時日吉古御来村に本土神社なきため、天災凶作につづき移住者定着することなく、民不安せずとなし。乃ち神社として落葉を得て、延宝8年(1680年)現社地に奉遷す。」と記されている。
- (5) 山代郷南新造院跡の南側に位置する道路である。ここでは遺跡発見時の名称を付したが、山代郷南新造院跡と想定地の追加指定の咨申を受けている。
- (6) 「古志本郷遺跡Y」では、多くの樹立柱建物や権現門の官衙跡等が確認されている。8世紀前半に建設された建物のなかでも、G区SB11・12の土塹方位は官道である正西道と同じであると指摘している。
- (7) 没軒遺跡では、7世紀後半から8世紀代にかけての樹立柱建物跡が確認されている。これらの建物も山道跡の方位と一致している。

#### 【参考文献】

- 山雲教育委員会 2000年 「西出雲駅南土地上画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書『浅柄道路』
- 櫻原町 1993年 「正西道の松村一松江大庭地内の古道をめぐってーー」『出雲古代史研究(第三号)』
- 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 1992年 「埋蔵文化財発掘調査報告書X」(中竹矢遺跡)
- 国土交通省中国地方整備局山陰工事事務所 2003年 奥伊川排水路建設予定期内地内埋蔵文化財発掘調査報告書XVI「古志本郷遺跡Y」
- 島根県教育委員会 1981年 「奥伊川出雲山代郷正貢道路」
- 島根県教育委員会 1984年 「風土記の丘地内地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ『小無田遺跡』
- 島根県教育委員会 1985年 「風土記の丘地内地内遺跡発掘調査報告書Ⅲ『西王寺跡』」
- 島根県教育委員会 1990年 「風土記の丘地内地内遺跡発掘調査報告書Ⅳ『苦子山城跡・市場遺跡・内洞石塔群』」
- 島根県松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 2011年 「松江城下町遺跡(殿町287番地)・(殿町279番地)発掘調査報告書」
- 太字府市教育委員会 2000年 「太字府条坊跡 XV-1断面部分解説」
- 中村大一 1996年 「山雲国土地上の空間認識と道路」『日本古代環境と計画道路』同成社
- 花谷氏 2014年 「山代郷南新造院(白王寺跡)再考」「山云弥生の森博物館 研究紀要第4集」出雲弥生の森博物館
- 松江市建設部建築課 松江市教育委員会 1988年 「下照山道路発掘調査報告書」
- 松江市土地開発公社 松江市教育委員会 1984年 「黒田跡跡」

## 土 器

遺物番号	状 況	遺物名	出土の場 所・土上土下	種類	器種	基盤 (cm)			調査・手法の特徴・文様	色調	備考	
						口径	底径	高さ				
						(mm)	(mm)	(mm)				
30.1	1	S803	SP20 (2.80)	土器類	杯	(11.3)	-	12.0	内: 磁器ナデ 内: 銅器ナデ	内: 淡黄色 外: 淡黄色		
34.1	1	S801	3 缶	泥器類	陶瓦片形	(12.2)	-	12.0	内: 磁器ナデ 内: 銅器ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 2~3 世紀式 (KC 第 2 四~五期・KC 前期)	
34.2	1	S801	3 缶	泥器類	壺の底部	-	17.0	12.0	内: 磁器ナデ 内: 銅器ナデ	内: 淡色 外: 淡色	KC~KC 前半	
35.1	1	遺物4	縄目土	土器類	圓錐	-	-	13.1	内: ナデ 内: 銅器	内: 淡色 外: 淡色	兜形土器、施錫	
35.2	1	遺物4	縄目土	土器類	圓錐	(11.8)	-	13.0	内: 磁器ナデ 内: 銅器ナデ	内: 淡色 外: 淡色		
35.3	1	遺物4	8 缶	泥器類	吉野村形	-	18.4	13.0	内: 磁器ナデ 内: 銅器ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 2~3 世紀式 (KC 第 2 四~五期・KC 前期)	
35.4	1	遺物4	9 缶	泥器類	瓦形	(19.0)	-	13.0	内: 磁器ナデ 内: 銅器ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 4~5 世紀式 (KC 第 3 五~六期・KC 前期)	
35.5	1	遺物4	9 缶	土器類	壺の把手	現在は 壺の把手	壺の把手 3.7	-	内: ハジカ中央や端部 内: 銅器	内: 淡色 外: 淡色	壺成形部を打ち抜いている	
35.6	1	遺物4	8 缶	土器類	管狀土器	(9.0)	-	13.0	内: 銅器 内: 銅器重	内: 淡色 外: 淡黄色		
35.7	1	遺物4	9 缶	土器類	圓錐形器	(8.8)	3.5	2.35	内: 磁器ナデ 内: 磁器ナデ、圓錐形切削面	内: 淡黄色 外: 淡黄色	新潟國御原 9~10 世紀式 (KC 第 3 五~六期)	
35.8	1	遺物4	9 缶	土器類	圓錐形器	(8.0)	11.0	11.0	内: 磁器ナデ 内: 磁器ナデ、圓錐形切削面	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 9~10 世紀式 (KC 第 3 五~六期)	
35.9	1	遺物4	黑褐色土	土器類	圓錐形器	-	4.2	11.0	内: 磁器ナデ 内: 磁器	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 9~10 世紀式 (KC 第 3 五~六期)	
35.11	1	遺物5	縄目土	土器類	聖皇天孫 吉野編	-	-	12.0	内: 白色 内: 磁器ナデ・桂樹葉形 内: 吉野編	内: 淡色 外: 淡色	中国製 人字形・吉野編 (KC 11)	
35.12	1	遺物5	土・中	陶器	盆鉢	-	-	15.0	内: 磁器	内: 淡色 外: 淡色		
35.13	1	遺物5	縄目土	陶器	盆	-	-	13.0	内: 淡色 内: 朱色 (茶色)	内: 淡色 外: 淡色	更別陶器、輪郭付 丸陶器 (1600~1780 年)	
35.14	1	遺物5	S801	陶器	■	12.1	4.3	3.0	内: 磁器	内: 淡色 外: 淡色	更別陶器、輪郭 丸陶器 (1610~1650 年)	
35.15	1	遺物5	S801	陶器	■	12.4	4.5	3.2	内: 磁器	内: 淡色 外: 淡色	更別陶器、輪郭 丸陶器 (1610~1650 年)	
35.16	1	遺物5	S801	陶器	■	12.6	4.7	3.1	内: 磁器	内: 淡色 外: 淡色	更別陶器、輪郭 丸陶器 (1610~1650 年)	
39.1	2	S804	SP22 (2.80)	泥器類	陶瓦片形	(10.0)	-	12.0	内: 磁器ナデ 内: 磁器ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 2~3 世紀式 (KC 第 2 四~五期)	
39.2	2	S804	SP22 (2.8)	泥器類	吉野村形	-	13.7	13.5	内: 磁器ナデ	内: 淡色	新潟國御原 2~3 世紀式 (KC 第 2 四~五期)	
39.3	2	S801	SP25	泥器類	陶瓦片形 瓦形	-	-	10.75	内: 磁器ナデ 内: 磁器ナデ	内: 淡色 外: 淡色		
39.4	2	S801	SP25	土器類	直底器	-	-	13.1	内: ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 吉野陶 (輪郭)	
39.5	2	S802	SP28 (2.8)	泥器類	蓋	(14.8)	-	12.45	内: 磁器ナデ 内: 磁器ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 2~3 世紀式 (KC 第 2 四~五期)	
39.6	2	S802	SP27 (2.8)	泥器類	圓錐形器	-	18.0	11.0	内: 磁器ナデ 内: 磁器ナデ、圓錐形切削面	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 2~3 世紀式 (KC 第 2 四~五期)	
39.7	2	遺物5	7 缶	泥器類	酒	-	5.1	9.0	内: 磁器ナデ 内: 磁器ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 1~2 世紀 輪郭 (1610~1650 年)	
39.8	2	遺物5	7 缶	泥器類	高台形器	-	13.7	15.4	内: 磁器ナデ 内: 磁器ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 4~7 世紀 輪郭 (1610~1650 年)	
39.9	2	遺物5	7 缶	泥器類	輪郭	-	-	13.7	内: ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 4~7 世紀 輪郭 (1610~1650 年)	
39.10	2	遺物5	7 缶	泥器類	輪郭	-	-	13.7	内: ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 4~7 世紀 輪郭 (1610~1650 年)	
39.11	2	遺物5	7 缶	泥器類	輪郭	-	-	13.7	内: ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 4~7 世紀 輪郭 (1610~1650 年)	
39.12	2	遺物5	7 缶	泥器類	輪郭	-	-	13.7	内: ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 4~7 世紀 輪郭 (1610~1650 年)	
39.13	2	遺物5	7 缶	土器類	陶瓦片形器	(10.0)	9.8	12.4	内: ナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 4~7 世紀 (KC 未定)	
39.14	2	遺物5	7 缶	土器類	酒	現存	大底 3.5	-	内: ナデ	内: 淡色 外: 淡色		
39.15	2	遺物5	7 缶	縄目土	土器類	記高尾竹形器	8.8	5.8	3.4	内: ロコナデ 内: ロコナデ	内: 淡色 外: 淡色	新潟國御原 8 世紀式 (KC 未定) 淡色

## 土器

遺物番号	区	遺構名	出土位置 出土土層	種類	面相	法量(cm)			測量・手法の特徴・支援	色調	備考	
						口径		底径				
						内	外	底				
20-16	2	遺構外	丁度	上縁附	柱尻泥付鉢	(6.4)	12.75	内:コロナデ 外:コロナデ	内:浅褐色 外:淡褐色	地盤400cm 4~12型式 11世紀後半~12世紀前半		
20-17	2	遺構外	丁度	上縁附	筒高台杯	—	17.60	15.31	内:コロナデ 外:コロナデ	内:灰白色 外:灰白色	11~12世紀	
25-1	3	5005	SP34	遺構附	沿岸杯	—	112.00	12.01	内:コロナデ 外:コロナデ	内:灰白色 外:灰白色	地盤 地盤400cm 4~5型式以降 10C後半~14世紀前半	
25-2	3	5005	SP34	遺構附	盆の底部	—	112.00	11.00	内:コロナデ 外:コロナデ	内:灰白色 外:灰白色		
27-1	3	5007	SP41	上縁附	腹輪・脚	19.00	—	—	内:コロナデ 外:コロナデ	内:灰白色 外:灰白色		
29-1	3	5002	4層	遺構附	盆の底部	—	—	—	内:コロナデ 外:コロナデ	内:灰白色 外:灰白色		
29-2	3	5002	4層	上縁附	脚	—	—	—	内:コロナデ 外:コロナデ	内:灰白色 外:灰白色	立窯系上縁脚	
31-1	3	5002	1層	遺構附	盆の底部	—	—	—	内:コロナデ 外:コロナデ	内:灰白色 外:灰白色	地盤400cm 3~5型式 10C後半~14世紀前半	
31-2	3	5002	1層	上縁附	盆の底部	—	5.8	—	内:コロナデ 外:コロナデ	内:灰白色 外:灰白色		
31-3	3	5002	1層	上縁附	—	—	—	1.5	内:コロナデ 外:コロナデ	内:浅褐色 外:灰白色	中腰持平か	
31-4	3	5002	1層	縦組	敷装 斜系 の縦組	—	15.50	13.00	内:の縦組 外:古墳類	内:オリーブ灰色 外:オリーブ灰色	地盤 大学付近組合(10C後半)	
31-5	3	5002	1層	縦組	脚	—	111.00	33.00	内:古脚	内:灰白色 外:灰白色	内:灰白色 外:灰白色	10C後半~14世紀前半 11C中期~12世紀後半
31-6	3	5002	1層	脚	脚	11.00	15.7	2.9	内:古脚	内:灰白色 外:灰白色	脚	
31-7	3	5002	1層	脚	脚	13.00	5.5	3.6	内:古脚	内:灰白色 外:灰白色	内脚(1580~1610年)	
33-1	3	遺構外	4層	上縁附	脚	10.00	14.20	2.1	内:コロナデ 外:コロナデ	内:灰白色 外:灰白色	内:灰白色 外:灰白色	内脚(1580~1610年)
33-2	3	遺構外	4層	脚	脚	10.00	—	—	内:脚	内:オリーブ色 外:オリーブ色	脚	
33-3	3	遺構外	4層	脚	脚	—	15.00	13.00	内:脚	内:オリーブ色 外:灰白色	内:灰白色 外:灰白色	内脚(1580~1610年)

## 石製品

遺物番号	区	遺構名	出土位置 出土土層	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
					最大径		最小径		
					最大径	最小径	最小径		
20-19	2	遺構外	剥作土	石製石	5.8	5.1	1.8	338.2	
23-4	3	遺構外	剥作土	石石	6.8	5.8	1.2	37.4	圓周有刃
33-5	3	遺構外	5002	石圓	5.4	5.5	1.7	74.4	

## 金属製品

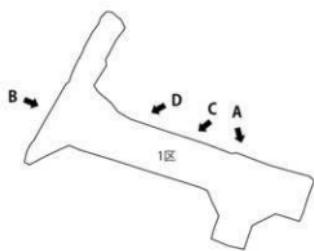
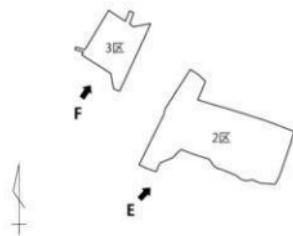
遺物番号	区	遺構名	出土位置 出土土層	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
					最大径		最小径		
					最大径	最小径	最小径		
12-1	1	5001	1層	小柄の葉茎	13.6	1.5	0.9	55.9	
20-18	2	遺構外	剥作土	脚	10.8	1.5	0.7	23.4	
33-8	3	5002	1層	小柄の葉茎	9.2	1.5	0.5	27.3	

## 瓦

遺物番号	区	遺構名	出土位置 出土土層	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
					最大径		最小径		
					最大径	最小径	最小径		
15-10	1	遺構外	8層	古代・平瓦	8.9	7.3	2.3	205.90	内:布目面 外:織目面を施す
21-1	2	遺構外	7層	古代・平瓦	11.6	10.1	3.6	535.02	内:布目面 外:織目面を
21-2	2	遺構外	7層	古代・平瓦	10.1	10.0	2.1	291.01	内:工字孔によるナギ、布目面が中やや残る 外:織目面が付着している
21-3	2	遺構外	剥作土	古代・瓦瓦	11.2	9.9	2.3	419.70	内:布目面 外:織目面の施すナギ
21-4	2	遺構外	7層	古代・瓦瓦	10.1	5.7	2.4	165.62	瓦縫目からなる部 内:布目面 外:織目面
31-9	3	5002	1層	古代・平瓦	10.0	7.8	2.2	103.18	内:風化、継ぎ面がむずかしくみられる



# 写 真 図 版



調査区完掘後全景写真 撮影方向 A～F (図版 1～4)



光泉寺遺跡から茶臼山を望む（南西から）



1区東側完掘状況（北西から） 撮影方向 A

図版 2



1区完掘状況(西から) 撮影方向B



1区SK01 完掘状況(南西から)



1区短頸壺出土状況



1区南壁土層断面(北東から) 撮影方向C



1区南西侧完掘状況・SI01(北東から) 撮影方向D



2区完掘状況(南西から) 撮影方向E

図版 4



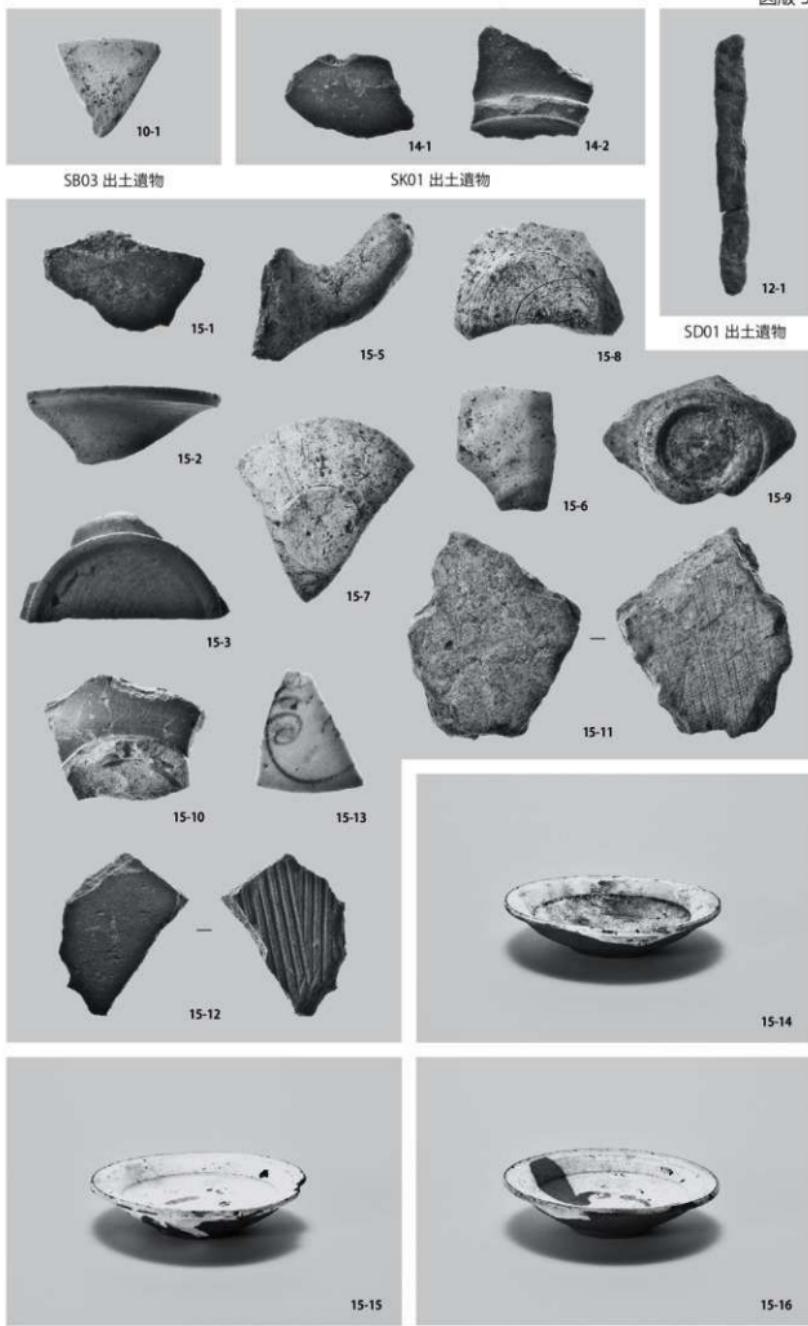
3 区完掘状況(南西から) 撮影方向 F



3 区 SP34 半截状況(南西から)

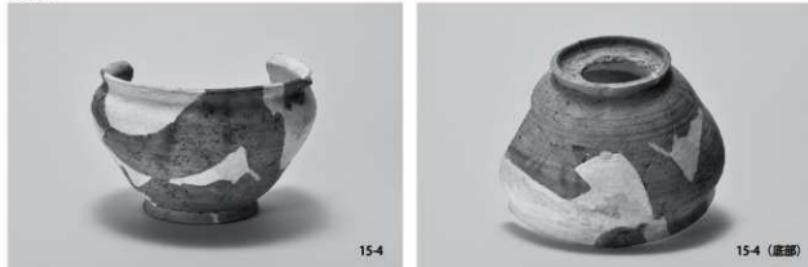


3 区 SK02 完掘状況(東から)

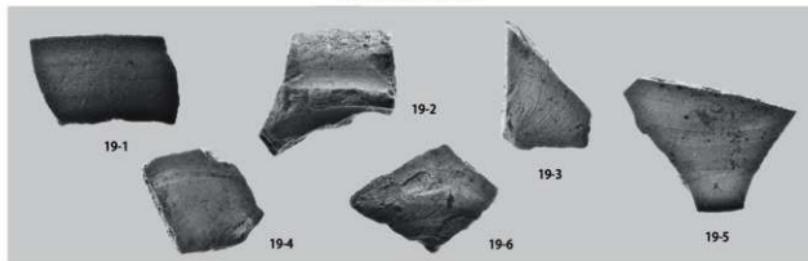


1区包含層出土遺物①

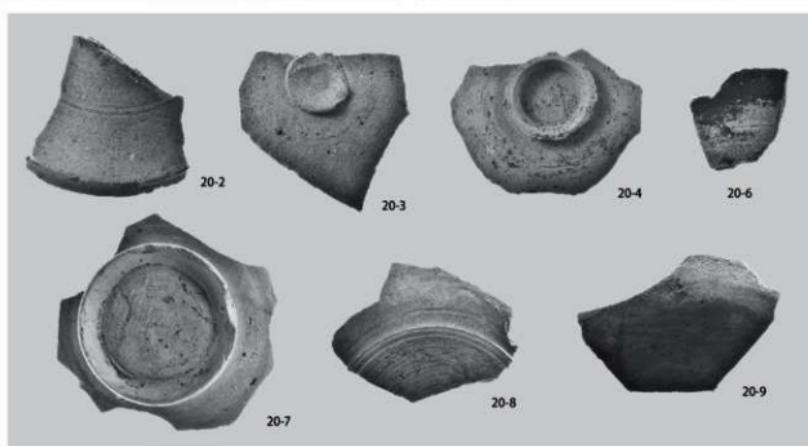
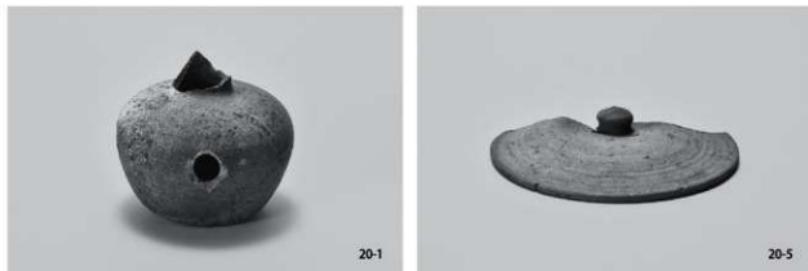
図版 6



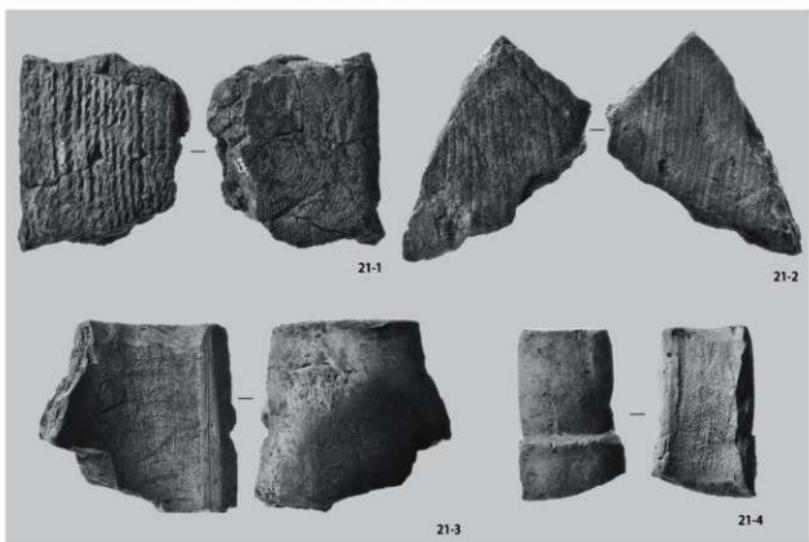
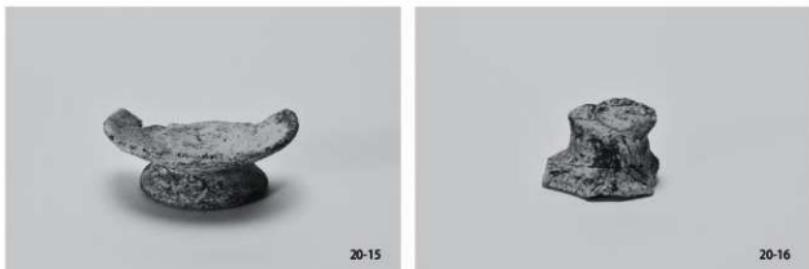
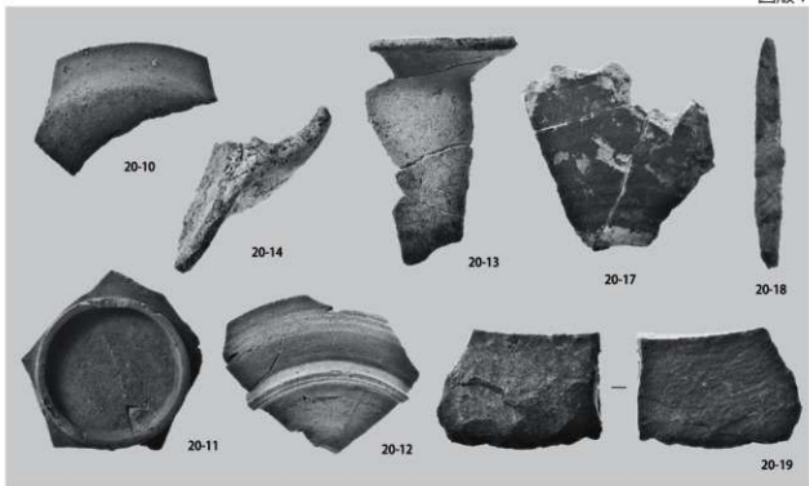
1区包含層出土遺物②



SB04・SA01・SA02 出土遺物

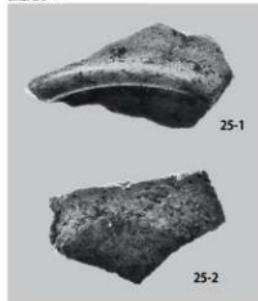


2区包含層出土遺物①



2区包含層出土遺物②

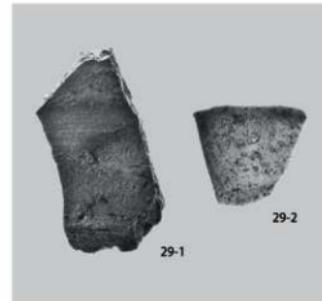
図版 8



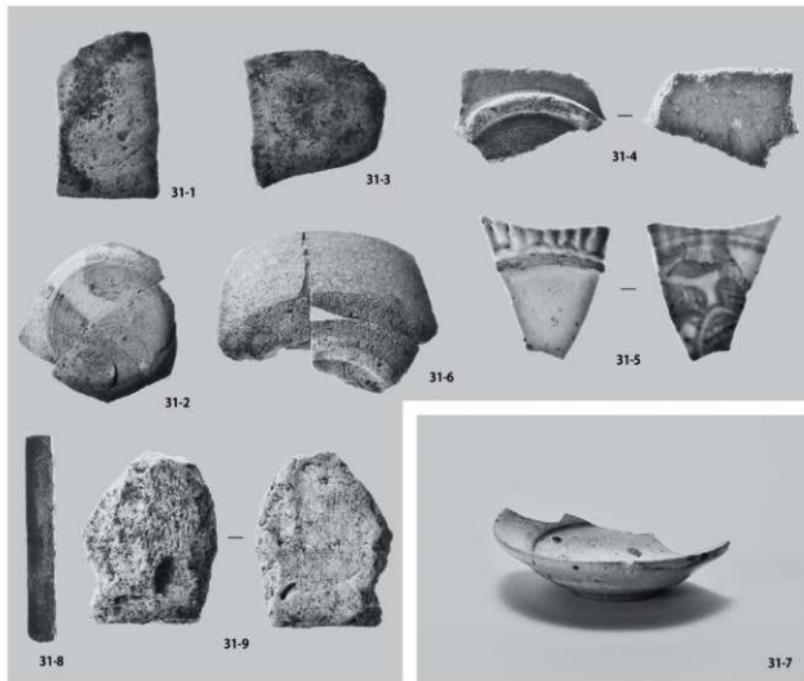
SB05 出土遺物



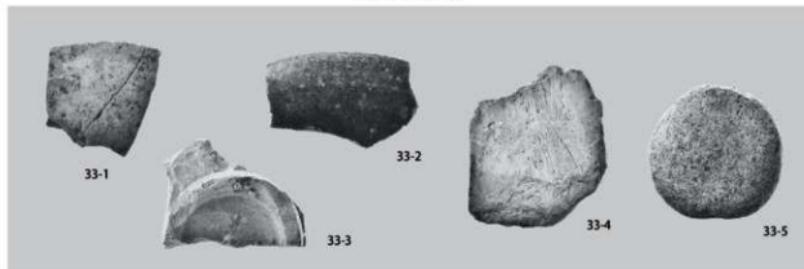
SB07 出土遺物



SK02 出土遺物



SD02 出土遺物



3 区包含層出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	こうせんじいせき						
書名	光泉寺遺跡						
副書名	(仮称) アークタウン山代造成工事に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第178集						
編著者名	廣濱貴子 川上昭一						
編集機関	松江市教育委員会 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町 86 番地 TEL: 0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団(埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀 1263-1 TEL: 0852-85-9210						
発行年月日	2017年2月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
こうせんじいせき 光泉寺遺跡	島根県松江市山代町 光泉寺349番1、 350番、350番続1 宇沖田354番1	32201	D-1157	35° 26' 01" 133° 05' 26"	20160704 ～ 20161020	368.2m <sup>2</sup>	(仮称) アークタウン 山代造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
光泉寺遺跡	集落跡	奈良・ 平安時代 ～ 近世	掘立柱建物跡 柱穴列 土坑 溝	須恵器 土師器 中世陶磁器 近世陶磁器 石製品 金属製品	中世の掘立柱建物跡、柱穴列を検出し、茶臼山南西裾野における建物の様相を垣間見ることができた。出土遺物では、古代の土器が多く出土し、その中には古代瓦や転用硯があることから、本遺跡南東側に位置する山代郷南新造院跡との関連が窺われる。		

松江市文化財調査報告書 第178集

(仮称) アークタウン山代造成工事に伴う発掘調査報告書

## 光 泉 寺 遺 跡

平成29(2017)年2月

発 行 松江市教育委員会

公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印 刷 有限会社 松陽印刷所

島根県松江市学園南 2-3-11